

2014年度 修 士 論 文

**営みの多様性がもたらす都市住民と自然の関係
神戸市民と六甲山系から見る具体的共存イメージの重要性**
Relations of city inhabitants and nature which variety of the working brings
Importance of specific coexistence image in the City of Kobe

三木 柚香
Miki, Yuko

東京大学大学院新領域創成科学研究科
社会文化環境学専攻

目次

1. 問題の所在	3
1-1. 人と自然の関係をいかにとらえていくのか	3
1-2. エコロジカルな社会	4
1-3. 本研究の目的	5
2. 先行研究	8
2-1. 生業について	8
2-2. 「都会の観念的自然観」の反論	9
2-3. 都市公園の役割とその限界	10
3. 調査対象地・調査方法	15
3-1. 神戸という街	15
3-2. 調査方法	16
4. 六甲山系	18
4-1-1. 「都市山」という概念	18
4-1-2. 「文化機能」と「環境機能」	19
4-1-3. 「生産機能」および3つの機能の関係性	24
4-2. 里山としての六甲山と里山論への可能性	26
4-3. 行政区分の「公園」と神戸市民にとっての六甲山系	27
4-4. 景観としての六甲山系	29
4-5. OPENな場所としての六甲山系	33
5. 六甲山系開発の歴史、A・Hグループ	36
5-1. 開祖、A・Hグループ	36
5-2. 六甲山の荒廃とグループの活動	37
5-3. グループが目指した自然	41

6. 六甲山系開発の歴史、行政・企業	43
7. 六甲山系開発の歴史、本多静六	49
7-1. 本多静六による植林事業	49
7-2. 本多が目指した自然	53
8. 現在の六甲山系と神戸市民の関係	56
8-1. 六甲山系の場所性	56
8-2. 働く場としての六甲山	59
8-3. 遊び場としての六甲山	63
8-4. 住む場としての六甲山	66
8-5. 場所性がもたらす共通認識としての六甲山系	70
8-6. 「共存」イメージ形成にかかわる阪神大震災	71
9. 六甲山系の「営みの多様性」から見る自然観	79
9-1. 六甲山観の深化プロセスと「共存」イメージ	79
9-2. 都市における自然の意味	83
9-2-1. 場所のアイデンティティに依拠した営みの場の確保	83
9-2-2. 観念的ではない自然観がもたらす「自然」への「態度」	83
9-2-3. グループが残した「新しい山の遊び」の文化的役割	85
9-3. 本研究の可能性と限界	87
10. 参考文献リスト	89
謝辞	93

1. 問題の所在

1-1. 人と自然の関係をいかにとらえていくのか

環境問題が世界のいたるところで議題にあがるなかで、いまだに「自然保護か開発か」という二項対立的な議論が残っている。しかし、環境倫理を中心に、環境社会学分野では、二項対立からの脱却を図り、「人と自然の関係」を捉えなおす試みがなされている。二項対立脱却のひとつの視点として、森岡正博は、「二項対立はまぼろしである」と指摘している¹。「自然保護」とは、自然それ自体に内在する価値があるのではなく、「守りたい」という人間の感情を守ることに等しいと述べ、また「人間のための長期的な利益」を目的とした「自然保護」については、その利益がすでに「自然」によって枠づけられているため、『自然とは無関係に決められる人間の利益』などというものは、最初から存在しない」と指摘している²。

また鬼頭秀一は、二項対立図式で環境問題を考える不適切さについて、全体論的な視点の欠如に問題があると指摘している³。「人と自然の関係」の議論の中心は、自然的環境であって、さらにそれに隣接して存在する社会的環境（社会的公正）や精神的環境（精神的・文化的側面）までを含んで議論されていなかった。「人間」と「自然」の関係性を考えるうえで、「人間」という一言のなかに含まれている、社会的、精神的環境を含む「人間の生活」には論点が置かれていなかったのである。「人と自然の関係」という広範で多様な関係について考えるならば、社会的、精神的環境を視野に入れた全体論的な視点が、不可欠になることは、カメルーンの野生動物保護を題材に用いて論じられている⁴。

全体論的な視点の欠如は、要素還元主義的手法によって関係を捉えようとしたことに起因しており、それに対する指摘は、二元論の限界のみならず、現在の世界において支配的な位置にある近代科学の限界を示すものでもあるといえる。全体論的な視点は、原子論的近代科学とは異なる視点を持つものであり、「自然固有の価値」や、ただそれだけで価値を

¹ 森岡正博 2008 「人間・自然—自然を守ることとはなにか」鬼頭秀一/福永真弓(編) 2008 『環境倫理学』 東京大学出版 p.27

² 同上：p.31

³ 鬼頭ほか(編) 2008 p.11

⁴ 安田章人 2008 「持続可能性を問う」 前掲：鬼頭ほか(編)：第8章 p.130-145

認めるというような「自然の内在的価値」に論点を置いた価値論的な視点ではなく、関係性や構造を重視した関係論的な視点によるものである。要素還元主義の手法をとる近代科学への批判は、全体論的な視点を通じて、結局は肯定される存在なのかもしれない⁵。

しかし、要素還元主義的な手法は、ひとつの物事を解体し、その構成要素を理解するうえでは、有用な手法であるが、人と自然のあいだに存在する「関係性の複雑さ」は、分解することなく捉えなおすことが必要なのである。なぜなら、相互的に関係しあっている「人と自然の関係」とは、不可分なかたちで存在しているからである。

1-2. エコロジカルな社会

近年の環境社会学の分野のなかでの主要議題のひとつに、農村地域における生業や遊び仕事による自然とのかかわりが挙げられるだろう⁶。それらは、分断された自然と人間の生活を再びつなぐものとして、大きな注目を集めている。まず特筆すべきは鬼頭秀一の『自然保護を問い直す』で示された、「全体論的視点の重要性」である。

「人と自然の関係」を考える場合、その対象となっている自然地域における「生活の有無」すなわち「生業を通じたかかわり」が重要視されてきた。「人と自然の関係」が、その地域において自然と深く関わりを持った「生活」をしていることを前提として語られることにはよく出会う。バイオリージョナリズムの議論はそのひとつの典型であろう⁷。こうした前提のもとで、環境社会学や環境倫理学といった分野が生み出す全体論的な視点は、問題解決のために大きな役割を果たすと考えられる。

また、人と自然の関係を考える際に重要だと考えられる点は、「存在の豊かさ」である⁸。「存在の豊かさ」は、井上有一が提唱したエコロジカルな社会という概念を構成するもの

⁵ 鬼頭秀一 1996 『自然保護を問い直す』 筑摩書房 p.251

⁶ 菅豊 2006 『川は誰のものか—人と環境の民俗学』 吉川弘文館、嘉田由紀子ほか(編) 2000 『共感する環境学』 ミルネヴァ書房など

⁷ バイオリージョナリズム:「生命地域主義」と訳される「生命 (bio)」と「地域 (region)」の造語。「地域の大地、動植物、川、湖や海、空気、家族、友人や隣人、コミュニティ、民俗文化、生産流通構造—これらのものと自分とのつながりを理解し、育て、維持し、喜びと感謝をもって受け入れていく」ビル・ディヴオール[Bill Devall] 2001 「エコロジカルな自己」、『ディープ・エコロジー—生き方から考える環境の思想』井上有一/アラン・ドレングソン、第8章 p.185

⁸ 井上有一 2012 「環境教育の『底抜き』を凶る—『ラディカル』であることの意味」、井上有一・今村光章(編)『環境教育学 社会的公正と存在の豊かさを求めて』(第1章)、法律文化社、p.11

で、「環境持続性」と「社会的公正」、そして「存在の豊かさ」の3つに構成要素を置き、それぞれ人間社会が自然環境に対して持続可能な非破壊的関係を築くこと、人間と人間のあいだに支配や搾取といった関係のない公正な社会を築くこと、私たち一人ひとりの人間がそれぞれを取り巻く世界とのあいだに自分自身納得のできる生の豊かさを実現していける条件を整えることを意味している⁹。

自然的環境の持続性と、社会的環境の公平性、そして、精神的環境の「豊かさ」を、「環境」や「人と自然の関係」の総体として捉えることで、人がどのような自然的環境のなかで、社会的公平性と精神的側面における豊かさを構築していくことができるのか。これが今後の社会においてきわめて重要な視点となるのである。本論文では、「環境」を総体として捉えるための試みとして、具体的な人と自然のあいだに生まれる営みの文化的側面に注目していく。

1-3. 本研究の目的

農村地区や里山だけではなく、都市計画や緑地計画においても、さまざまな視点から人と自然の関係は考えられてきた。都市における緑地計画の論点は、いかに緑地を配置し、人々にとって「すみやすい街を作るか」に置かれている。そして、その技術的側面に関する研究が中心となって、生態学や造園学といった分野での研究が進められてきた。その緑地計画の在り方は、都市公園などにもすそ野を広げており、大都市圏内に大規模な緑地公園を作るなど実践されている。昭和51年には都市公園法施行令、昭和54年には、都市計画法施行規則が改正され、大規模公園の目的を「休息、鑑賞、散歩、遊戯、運動等総合的な利用」とし、その配置は「住民の週末型の屋外レクリエーション需要の実体を十分に勘案し、自然的条件、交通の条件等を配慮するとともに、災害時の最終避難地としての機能を十分に発揮することができるように配置する」べきであると示されている¹⁰。住みよい環境の創造を主目的とする都市計画において、公園緑地の目的は、明確にされており、また、その緑地は、ランドスケープや生物多様性などを中心に構成されてきたのである。

このようにして、一見すると都会における自然は、人為的目的に即したかたちで造られたものであると捉えられがちで、またそれが「観念的な自然観」をもたらすものとして、

⁹ 井上：2012：p.11

¹⁰ 古澤達也 1999「大都市圏計画と大規模公園緑地」ランドスケープ研究 62（4）p.304

しばしば批判の対象となってきた。環境社会学の分野においても、主題にあがる地域、場所の多くは、都市郊外、あるいは農村地区である。その地域における地理的な条件から生まれる歴史性や文化に着目し、「自然」とのかかわりを総体的に捉えなおす試みが積極的に行われてきたのである。

しかし、都会の住民が「観念的な自然観」を持っているという批判は、そう簡単に言えるものではない。日本の都市には、公園緑地以外にもさまざまな自然的環境が存在している。雑木林や河川、また都市部に近い山も存在している。山や川などの自然的環境が物理的に近く存在している地域は、徳島県徳島市の眉山や兵庫県西宮市の甲山など多く挙げられる。平野部の少ない地域においては、市街地から比較的簡単にアクセスできる山や川は多い。そのような都市に着目し、都市部における人と自然の関係を積極的に捉えなおしていくことで、従来論じられてこなかった都市部における人と自然の関係について考察していきたい。

本論文では、観念的とされる自然のあり方を見つめ直すことで、都市における人と自然のかかわりをポジティブに捉えなおすことを目的としている。また従来の環境社会学において、着目されてきた「生業」の舞台を農村地区や里山から都市へと移し、「営み」の多様性を都市生活から明らかにする。緑地計画のなかで深く議論されてこなかった、人と自然の関係における文化的側面、精神的側面の重要性および都市住民が持つ「自然観」がどのように構成され、営みとつながっているのかを明らかにしたい。

事例対象地には、兵庫県の県庁所在地である神戸を選定した。詳細は後述するが、神戸は、150万以上の人口を抱える大都市である。また市街地の北側にある神戸市南部地域と北部地域の間には六甲山脈がある。標高は最高峰で1000メートル近くに達し、神戸の象徴的存在になっている。山脈が大都市に隣接したかたちで存在し、多様な文化を育んできた神戸に着目することで、「営み」の多様性を見ることができると考えた。都市公園や里山、町村地区とは異なった関係を捉えることができると考え、調査対象として選定した。

六甲山系と神戸市民の社会的・文化的役割を明らかにし、その役割がもたらす神戸市民との関係を具体的に探っていく。またその関係性から、どのような六甲山観を形成しているのかを検討し、神戸市民にとっての六甲山の意味を明らかにしたい。またその意味が「人と自然の関係」を考えるうえでなぜ重要であるのかを考察し、「都会における人と自然の関係」を豊かに捉えなおすための視点となることを目的としたい。

以下は本論文の構成である。第 2 章は、観念的とされる都市の自然観に関する研究、都市公園に関する先行研究から、環境社会学の分野において今後検討が必要と思われる論点をいくつか挙げ、事例研究へと進む。第 3 章では調査対象地の概略および調査対象者の詳細を述べている。第 4 章は、六甲山系に与えられた都市山という概念を中心に、六甲山系の役割について考察している。特に「生産機能」については、「生業」と「生産」に着目し、「生産機能」のもたらしうる役割の拡張について考察している。第 5 章、第 6 章、および第 7 章は、六甲山系に関する歴史的考察とし、「六甲山系の開発」的側面にフォーカスしている。またグループと本多が目指した「自然」がどのようなものであったのかを検証し、彼らのもたらした「文化的側面」について分析している。第 8 章では、主に聞き取り調査から、六甲山系にかかわる人々が持つ「六甲山観」について検証する。最終章は、愛着とアイデンティティ、および震災の経験から、第 8 章で明らかになった「六甲山観」の土台にある「自然観」の分析を試みている。最後に、都市部における自然の重要性を、六甲山と神戸市民の事例から明示し、人と自然の関係を考える新たな視点を与える考察としたい。

2. 先行研究

2-1. 生業について

鬼頭が提唱する「社会的リンク論」は、「生業」の営みに注目し、自然との関係の在り方について、規範的な構造を明らかにしようとするものである¹¹。社会的リンク論には、社会的・経済的リンクと文化的・宗教的リンクがあり、この2つのリンクが人と自然の関係を特徴づけるものであり、自然保護と社会的不公正をめぐる問題もそのなかで捉えようとしている¹²。それらの事例に挙げられる問題は、「『生業』こそが人間と自然とのかかわりそのものであると考え¹³」られている。またバイオリージョナリズムは、人間によって分断された地域ではなく、自然の特徴により一つのまとまりを持つ地域（生命地域）において、持続可能な地域経済、自治による分権化された政治とその土地独自の文化を育てていこうとするものであり¹⁴、「それぞれの地域に根ざして生きる必要性を政治的・社会的に表現したもの¹⁵」である。この概念も、その流域で密接に「生活」を営んでいることが前提となっている。

鬼頭は、「生業」のなかには「遊び仕事」が存在するとして、経済的な利益が得られなくても、精神的に受け継がれていく「仕事」の重要性を説いている。「遊び仕事」は、長い世代にわたって受け継がれてきた技術の継承の役割を果たすこともあるし、その地域における自然的環境とのかかわりを紡ぐものとして注目すべきものである。都市には農村地域を中心に存在する経済的利益を目的とした「生業」はほとんど存在していない。しかしながら、都市公園緑地など人工的かつ規制的に造られた自然的環境のみが都市部における自然的環境ではない。鬼頭のように「生業」を広義に捉えることで、都市における「生業」、すなわち「人と自然のあいだに生まれる営み」に目をむけてみたい。

¹¹ 鬼頭（ほか）：2009：p.16

¹² 同上：p.17

¹³ 鬼頭：1996：p.116

¹⁴ 井上有一/アラン・ドレングソン（編）2001 『ディープ・エコロジー—生き方から考える環境の思想—』 昭和堂 p.20

¹⁵ ビル・ディヴォール[Bill Devall] 2001 「エコロジカルな自己」 前掲：井上（ほか）：第8章：p.184

2-2. 「都会の観念的自然観」への反論

人と自然の関係については、近年多くの議論がなされてきた。なかでも注目したいのが、丸山康司の北限のサルに関する研究である。丸山の研究は、相互関係の複雑さを明らかにし、サルという一種の生物が、生活者において「さまざまなサル」という具体的な存在として認知されていることを示した。また「自然保護再考」においては、自然と人間の距離について言及し、人と自然の関係を二項的ではなく、総体として捉える新たな視座を提唱しているといえ、またその在り方について示唆に富む視点を提供している。とくに、注目すべきは、親和的ではない人と自然の関係に着目している点である。自然は多様な機能を持ち、それに対する人間の認識も多様であるが、その「すべての要素が『自然』という枠組みの中で調和的に共存するわけではない¹⁶⁾」と指摘し、脇野沢村におけるサルと周辺住民とのかかわりを事例に、「共存」のイメージを検討している。丸山は、総理府のアンケートを引用し、一般的な自然保護のイメージについて、「大切な自然を守るために、開発規制を行い自然保護の呼びかけを行う、という点に集約されるようである¹⁷⁾」と分析している。しかし、このようなアプローチが有用である場合もあるとしながら「自然との共存という枠組みのなかで社会のあり方を考察する場合、関係の有無だけではなく両者の相互関係の中でどのように自然と関わってゆくかが重要な問題のひとつ¹⁸⁾」と指摘する。

また丸山は、総理府のアンケート結果から得られたような共存イメージは、都市部において顕著にみられるものであり、「町村部ではより具体的に自然を把握し、自らの生活に関連付けながら自然保護について理解している¹⁹⁾」と述べ、都市部における自然保護に対する概念やイメージの構築は、観念的なものとし、自然を具体的に捉えることができているのではないかと指摘する。しかし、都市部で生活する人間がなぜ、自然を観念的にしか捉えることができないのかについては詳述されていない。もちろん、リサイクルや節電が地球のためになるのだから、というような社会構造の問題から視点を恣意的に逸らさせるような、ある種の誘導のような「自然」のとらえ方が見られるのは、都市部が多だろう。そういった点は、自然を観念的に捉えた結果といえるかもしれない。しかしそれは、

¹⁶⁾ 丸山康司 1997 『『自然保護』再考-青森県脇野沢村における『北限のサル』と山猿-』『環境社会学研究』(3) p.151

¹⁷⁾ 丸山：1997：p.151

¹⁸⁾ 同上：p.152

¹⁹⁾ 同上：p.152

人口の増加や生活の多様化のなかで、自然との接点が日常生活において減少していることが少なからず関与しているとは考えられるが、観念的にしか自然を認識できていないということの最大要因と決定づけることはできるのだろうか。

只木良也は、長野県小海町の「ふるさとの森」制度を紹介している。この制度は、分収育林制度で、林業不況による財政難で手入れ不足になりがちな森林を都市住民が出資し、将来その森林が材木として売れたときの収入を森林の持ち主と出資者でわけるという制度で、多くの首都圏在住者が出資した。只木は、森林の本質的な効用は、メンタルに対する効用だとしたうえで、この「ふるさとの森」制度は、「森林のこの本質的なメンタルな効用こそ遠い都会に及ぶもの」で、「遠く離れた都会と森林都市的自然を結ぶ太い絆だ」と述べている²⁰。このように、都会の住民が出資することで、「『自分の森をもつ』ゆとり感²¹」や「『30年間の夢』を育む²²」ロマンを持つことで、遠く離れた森林とつながっているという認識を持つことは、個人的な欲求を満たす方法としては優れたものかもしれない。しかし、これらは人と自然の関係を具体的に捉えるということにはならない。日常的に目にすることもなく、その森林に実体的に関与することもなく、ただ出資して、メンタルの効用を得るということは、具体的に自然を認識しているとは言い難い。このような事例からすると都市住民が自然を観念的に捉えているという批判は、的を得ていると考える。関東平野という日本最大の平野を抱える東京を中心とした大都市では、たしかに自然との接点を日常的かつ無意識的に持つことは難しいだろう。たしかに、近年活発化している都市公園の開発や里山での活動などは、都市部において自然とのふれあいや、「緑」への欲求が高まっている証拠といえる。続いて、その欲求の表れとも言える公園緑地や都市公園の都市部での役割について見ていく。

2-3. 都市公園の役割とその限界

公園緑地や都市公園に関する研究分野においては、都市住民にとって「自然」や「緑」というものが求められているものであることが前提に議論されている。石城謙吉は「『生

²⁰ 只木良也 1988 『森と人間の文化史』 NHK 出版 p.180

²¹ 同上：p.178

²² 同上：p.178

活のための森』を現代社会に復活させ²³」ようとする努力の表れが里山ブームのひとつの要因であるとしている。また都市公園に求められるようになったもう一つの側面として、「心身の休養」を挙げ、近代化にともなって新たに生まれた森林への欲求であると述べている²⁴。都市林の増加は、脱都市化の現れであり、最初に都市が発生した方向性が誤っていたのではないかと北村昌美は指摘する²⁵。このように、都市部の人間において、「緑」が求められる動きが活発になってきている。

それらは、しばしば失われた自然との接点を取り戻そうとしている回帰的な発想として批判の対象となることもあるが、都市住民にとって、とくに平野部に住む都市住民にとっては、自然と触れ合う機会というものが、農村地域周辺などと比較して著しく少ないことは、しかたがないことである。そのような自然と触れ合う機会が少ない地域にとって重要となっているのが、公園をはじめとする都市の緑地である。平田富士男は、「まち」を構成する基本的な要素の基盤（インフラストラクチャー）のなかに、道路、下水道と並んで公園を位置づけている²⁶。そしてそれらの施設が「住みよいまち」となるために開発基準許可や都市計画法といった法整備の下で、整備、配置されることが重要であると指摘している²⁷。インフラストラクチャーのなかで、とくに「オープンスペース」とよばれる「公共の空地」は、直接経済活動の場とならないためその重要性が見失われがちであるため、「法律による規制にまで訴えかけて²⁸」確保されるものであると述べる。平田が重要だと述べる「みどり」の役割には、「存在効果」と「利用効果」があり、前者は「みどりの空間が存在するだけで発揮される効果」、後者を「実際に利用することでもたらされる効果」とし、「クオリティオブライフ（QOL）を実現していく」場として説明する。最終的には、「環境」「レクリエーション」「防災」「景観」の4つに集約できるとした²⁹。平田の記述によると、住みよいまちをつくるためには、法的に規制・整備・確保された「みどり」が必要だということである。

このような公園緑地の捉え方は「都市的土地利用の要請が強い地域における土地利用計

²³ 石城謙吉 1994 『森はよみがえる・都市林創造の試み-』 講談社 p.22

²⁴ 石城：1994：p.23

²⁵ 北村昌美 1995 『森林と日本人-森の心に迫る-』 小学館 p.325

²⁶ 平田富士男 2004 『都市緑地の創造』 朝倉書店 p.6

²⁷ 同上：p.8-9

²⁸ 同上：p.9-10

²⁹ 同上：p.13-19

画の問題³⁰」であり、緑地に関する法整備はそのような地域の「まとまった『緑地』を担保する事実上唯一の手段に近³¹」いとされる。しかし、上記のような点画一的な手段、すなわち法整備に確保された緑地計画が、「QOL」や「心身の療養」の役割を真に果たすといえるのだろうか。仮にそのような場の提供に成功したとして、そのような緑地にどのような意味をもたらすことができるのだろうか。彼らの示す「環境」「レクリエーション」「防災」「景観」の4つの公園緑地の役割は、「公園緑地」というツールを通じてもたらされるもの、または法整備によって、作られた「公園」から獲得したものである。それはすなわち、緑地を「役割を持ったオブジェ」と捉えることになるのではないだろうか。地域における歴史・文化的文脈のない「公園緑地」から、人と自然の関係を捉えようとするのは、観念的自然観という視点からは、批判の対象となりえることは十分に理解ができるだろう。なぜなら、そのようなツールとしての緑地に、人と自然の具体的なつながりが存在していない。そういった点から、丸山の都市部の住民に対する批判は、的を射ているといえる。公園緑地は、人間が管理可能な範囲において整備されるものであり、またそれに対する法規制も存在する。このことが、公園緑地の役割を限定的にする主要因と考えられる。

「公園緑地」と指定されることによって、人から自然への働きかけが限定的になる。たとえば、落ち葉は「掃除」され、「整備」された木々は、視覚的にもたらされる「癒し」とどまってしまわないか。またその維持・管理は基本的に人間に委ねられていく。その結果、自然的環境から人への働きかけに具体性が欠けていくものと考えられる。

近代「公園」の歴史は古く、始まりは労働の生活環境の悪化が深刻な社会問題になっていたロンドンにあるといわれている³²。主に王室が所有していた公園が市民に開放されるかたちで、また富裕層を対象にしたものであった³³。また日本では、幕末から明治初頭にかけて横浜と神戸居留地において公園創設の動きがあり、公園導入は古くから庶民に親しまれてきた社寺境内等を公園と名付けることにより近代都市の都市施設として位置づけたのである³⁴。造園学分野においては、「戸外生活空間を対象として、これに自然的な審美性を追究することを造園学の主目的としていた³⁵」。明治13年に開設した奈良公園は、「自然的

³⁰ 古澤：1999：p.307

³¹ 同上：p.307

³² 石川幹子 2001 『都市と緑地—新しい都市環境の創造に向けて』 岩波書店 p.22

³³ 同上：p.22

³⁴ 同上：p.192

³⁵ 辰巳修三 1974 『緑地環境論—都市域の緑地造成計画』 地球社 p.164

な立地を巧みに活かした造園技術に支えられた公園³⁶」は、レクリエーション利用のほかに地域の自然的資源の担保という役割があったといわれている³⁷。辰巳は「近代造園学の基調は人間の生存環境と生物の生存環境の両者の環境保全を志向するところにある³⁸」とし、「緑地計画が人工的な環境造成を優先し、そのなかに緑地を造成しようとする方向へ³⁹」、従来の造園学とは 180° の旋回を見せたと批判しており、早い段階で「公園緑地」の役割のなかに、生物の環境と人間の環境のダイナミズムを理解したうえでの造園の在り方を提示している⁴⁰。

日本の近代公園は、主にイギリスなど欧米の「公園」の在り方を参考にしたものであった。その緑地機能の変遷を辰巳は①従来の庭園、②都市公園としての独自の発展期③都市計画に組み込まれたかたちでの都市公園④広域的緑地創設の 4 段階であると分析する。「自然公園」「国立公園」は④広域的緑地創設の段階にあり、六甲山系は、瀬戸内国立公園に編入されており、広域的緑地として分類される。このように、近代公園は、近代社会の生活パターンの変化に伴って、公園が有する緑地の利用目的も変化し、「公園」の枠組みが拡大されてきたのである。同時に、「公園」には緑地保全の役割が組み込まれるようになり、広域的緑地創設へとつながっていくのである。

「自然公園」「国立公園」とは少し異なった緑地保全もなされている。多摩丘陵におけるフットパスの事例は、里山景観保全という視点から緑地保全を実践した。この多摩丘陵フットパスの目的は、「地域の魅力をアピールし、多くの市民に知ってもらうことで保全の意識を高める⁴¹」こと、および「点でしか保全されていなかった緑地を線（フットパス）で結び、その線を面（地域）へと拡大していくことを狙ったもの⁴²」であった。このフットパスの起源は、イギリスの Right of Way のひとつであり、歴史的慣行として存在していたが、1949 年に法律で規定され、1968 年法でほぼ確立された、人々に与えられた「そこを自由に歩く」権利⁴³である⁴⁴。国内においては、フットパスを権利として与える法整備はなさ

³⁶ 古澤達也 1999 「大都市圏計画と大規模公園緑地」ランドスケープ研究 62 (4) p.304

³⁷ 同上 p.304

³⁸ 同上 : p.164

³⁹ 同上 : p.164

⁴⁰ 辰巳 : 1974 : p.165

⁴¹ 宮崎雅雄ほか 2004 「多摩丘陵におけるフットパス計画による里山景観保全への取り組み」、『ランドスケープ研究』68 (2) p.127

⁴² 同上 : p.129

⁴³ 重松敏則ほか 1994 「イギリスの自然歩道システムとその運営管理について」『造園雑誌』57 (5) p.325

れていないが、緑地保全のあり方として、注目されている活動のひとつである。しかし、このフットパスは、その通路における景観を楽しむことに有用であっても、身体的活動が「歩く」ことに限定されている。「公園緑地」と同様に、かかわりのあり方が限定的である点から、都市部における緑地保全の枠組みを広げうるものにはなりにくい。

以上のことから、「公園緑地」の緑地保全の観点からではなく、都市部における「自然」とはなにかを考察し、「自然」とのかかわりをどのように捉え、評価することができるのかを六甲山系と神戸市民を事例に探っていく。

⁴⁴ イギリスで認められた **Right of Way** には、フットパス（徒歩のみで通行できる）以外にも **Bridleway**（徒歩、乗馬、自転車のみ）、**Byway**（主に徒歩、乗馬、自転車で利用するが農林業者などの自動車の通行も認められるもの）がある。同上：p.326

3. 調査対象地・調査方法

3-1. 神戸という街

神戸市は、兵庫県南東部に位置する兵庫県の県庁所在地である。面積は、550.53km²で、兵庫県における専有面積は6.56%となっている。人口は1,542,230人（2012年12月現在神戸市発表）、面積の大半は六甲山系が占めており、市街地の面積は全体の10%程度となっている。神戸港（当時の兵庫港）は約150年前（西暦1868年1月1日、和暦慶応3年12月7日）に開港しているが、平清盛が福原京に都を移したことがきっかけとなり、貿易港として栄えてきた。貿易港として栄え続けてきたために、外国時居留地が設定され、西欧文化が多く流入してきており、音楽や建築だけではなく、人々の生活様式、また自然とのかかわり方にも大きな影響を与えてきた。

六甲山系は、大小の山々からなる南北に狭く、東西に数十キロにおよぶ山脈で、神戸市民の多くは、六甲山系の総称を「六甲山」と呼んでいる。最高峰である六甲山は、標高 931.1メートルに達する。



(神戸市ウェブサイトより抜粋：2012.12.28-2013.01.26)

<http://www.city.kobe.lg.jp/information/public/online/rokkosanpo/about/c05/img/photo01.gif>

対象となるのは、主に六甲山と再度山である。聞き取り調査を行った場所は、六甲山が中心となっており、植林事業に関しては再度山を対象としている。違う山であるが、同じ山脈にあり、その役割も類似していること、神戸市民との関係性を探るうえでは重要な 2 つの山であることから、この二つの山を選択した。

3-2. 調査方法

研究方法は、主に聞き取り調査および文献調査によるものである。主な対象は、六甲山で働く人々や六甲山において生活をしてきた六甲山居住者、および六甲山のふもとに生活拠点を置く居住者、また京阪神地域から訪れた登山者となっている。

六甲山系に足を踏み入れる人は、非常に多く、きっかけも多様である。聞き取りを行った人々は、六甲山系と幼少からかかわってきた人、年齢を重ねてから友人に誘われた人などさまざまである。積極的に関心を持ってきた人だけではなく、できるだけ多様な「山に入るきっかけ」を確保することで、六甲山系に対する「景観」としての役割や六甲山系へのまなざしの変化をとらえるべく、対象を選定した。

六甲山系を「働く場」とする人は、六甲山系とかかわりがなかった大武氏とかかわりのあった M 氏を対象にした。六甲山系とかかわりのなかった人から見る六甲山系の姿と、そこで働くことで見られる六甲山観の変化を分析することで、六甲山系が働く場として、どのような場所性を持つのかをより広くとらえることができると考えた。同時に、もともと六甲山系となんらかのかかわりを持っていた M 氏を対象とすることで、働く場としての六甲山系のなかで、どのような価値観形成の違いを生むのかを考察できると考え、またそれが六甲山系の場所性に寄与しうるのかを明らかにする可能性があるかと判断した。

また、六甲山系に住まう人として、登六庵の矢野氏を対象とした。彼は高い意識を持って六甲山系への移住を決断したわけではない。彼の親の世代の決定によって、矢野氏の六甲山系とのかかわりが始まっているわけだが、彼の生い立ちから、六甲山系がどのように位置づけられてきたのかを探ることによって、「住む」場としての六甲山系の姿を捉えられようと考えた。意識的に移住をした人を対象にした場合は、六甲山系に求めるものが明らかになっている場合もあり、物質的景観以上のものを最初から六甲山系に抱いている可能性もある。その場合、六甲山観が、六甲山系という場所性から生まれたものではなく、より外部的な要因が影響している可能性があると考えたため、矢野氏を対象者として選定した。

対象者の詳細は以下である。

神戸市環境局環境創造部環境評価共生推進室 西谷寛氏（2010年04月22日、2010年06月15日）

神戸市建設局公園砂防部森林整備事務所 高畑正氏（2010年10月06日）

登山者50代女性 A氏、B氏、C氏、D氏（2012年10月25日）

登山者20代女性 O氏、K氏（2012年10月25日）

登山者60代男性 T氏、N氏（2012年10月30日）

登六庵店主 矢野氏（2012年10月31日、2012年11月17日、2012年11月23日）

兵庫県自然保護センター勤務 60代男性 M氏（2012年10月25日、2012年11月11日）

ホールアース自然学校勤務 大武圭介氏（2012年10月25日）

六甲山移住者 40代女性Y氏（2012年11月17日）

六甲山専門研究員 高橋敬三氏（2010年06月18日、2010年11月13日）

NPO 法人エコレンジャー元会長 朝戸吉照氏（2012年10月23日、2014年1月2日）

4. 六甲山系

4-1. 「都市山」という概念

「自然」という言葉には、多種多様な価値観が含まれている。「自然」と聞いて、里山の風景を思い浮かべる人もいれば、鬱蒼とした森を思い浮かべる人、草原や川、いつか見た外国の風景だったりもするだろう。それぞれの人のなかに「自然」が描写されている。「自然」というものを理解しようとしたとき、それらは個々人のなかにある記憶や実体験、またメディアなどを通じて作られているといえる。六甲山系という「自然」は、どのような「自然」なのだろうか。

本論文の対象地域には、首都圏にみられるような大規模な公園はなく、主に「児童公園」「普通公園」と呼ばれるような、遊具と広場が一体となったような公園がほとんどを占めている。六甲山系は、後述するように「公園」が持つ役割も含みながら、「山」としての景観や防災の役割も果たしている。多くのハイカーが訪れ、NPOなどの市民活動も盛んである。また六甲山系に住居を構える人々もいる。大規模都市公園とは異なった性質を多く持つ「山」なのである。そんな「山」と隣接した場所における人と自然の関係を、まずは、神戸市がどのような位置づけているのか探っていく。

神戸市は、六甲山系を「都市山」として位置づけ、そこに3つの機能を持たせている。神戸市が示すその定義は以下の通りである。

大都市の環境機能を維持する山、都市住民の学習・文化などの場としての山、という観点から「都市山」という用語を提案しました。(中略)都市山に必要な役割は(中略)薪などを生産する生産機能、生物多様性保全・防災などの環境機能、学習・レクリエーション、観光などの文化機能です⁴⁵。

それぞれの機能について、定義の詳細は示されていないため、六甲山系における活動の内容と照らし合わせながら、その分析を以下で試みたい。

⁴⁵ 神戸市 『都市山六甲の植生管理マニュアル』 兵庫県立人と自然の博物館

神戸市が提唱する「都市山」とは、「文化機能」「環境機能」「生産機能」の3つの機能を持った六甲山系を目指すものである。本節では、「文化機能」「環境機能」、および「生産機能」のふたつに分けて、分析していく。「文化機能」「環境機能」については、NPOや企業施設を中心に、さまざまな取り組みやレジャー場所としての提供がなされており、その内容・実体を把握することが可能である。一方で「生産機能」については、「薪などを生産する生産機能」という記述にとどまっており、その「生産」の実体を捉えるには、上記の神戸市の定義だけでは、不十分であると考えられる。神戸市の定義のままの「生産機能」では、その役割がほかのふたつの機能に比べてやや限定的になってしまう。六甲山系における「生産機能」の内実は、より広義に捉えられる可能性がある。「生産機能」の役割が、「薪などの生産」以外にどのようなものがあるのかを検証するとともに、3つの機能の関係を分析したい。その分析によって、「都市山」という概念が示す独特の六甲山の在り方を示したい。

4-1-1. 「文化機能」と「環境機能」

六甲山と再度山には「文化機能」「環境機能」としての役割が多く存在している。六甲山系は、1956年（昭和31年）5月10日六甲山地区として瀬戸内国立公園の一部へ観光利用を目的とした国立公園として編入された⁴⁶。その後も整備は進み、六甲山には、六甲山人工スキー場、六甲スカイヴィラ、オルゴール館、ヴィーナスブリッジといった現在においても多くの人々が利用する施設がある。これは「文化機能」の役割を果たしている。

「環境機能」としては、まず治山の役割を果たしている。水源としての役割がどれほど果たしているかは、定かではないが、布引の貯水池付近には「神戸市民の水」であることが書かれた看板がいくつも立っており、ハイカーの人たちに資源の保護を呼びかけている⁴⁷。生物多様性という側面からは、大都会がそばにあるとは思えないほど多様な生物が存在している。たとえば、アカダマキノガサダケやモリアオガエル、キヨスミウツボなどの生息が確認されている⁴⁸。

⁴⁶ 玉起彰三 1997 『六甲山博物誌』のじぎく文庫 p.147

⁴⁷ 市ヶ原へ向かう登山道にて 2010年05月01日

⁴⁸ 神戸市 2009 『守りたい 神戸の生き物百選』 神戸市

また、神戸市内のどの区からもアプローチできる登山道は神戸市が管理しているだけでも約 220 キロメートルもあり⁴⁹、多くのハイカーに親しまれ、六甲山系を訪れる約 8 割は京阪神に住む人々であり、近隣住民に特に親しまれている⁵⁰。これは「文化機能」と「環境機能」の両方の側面である。

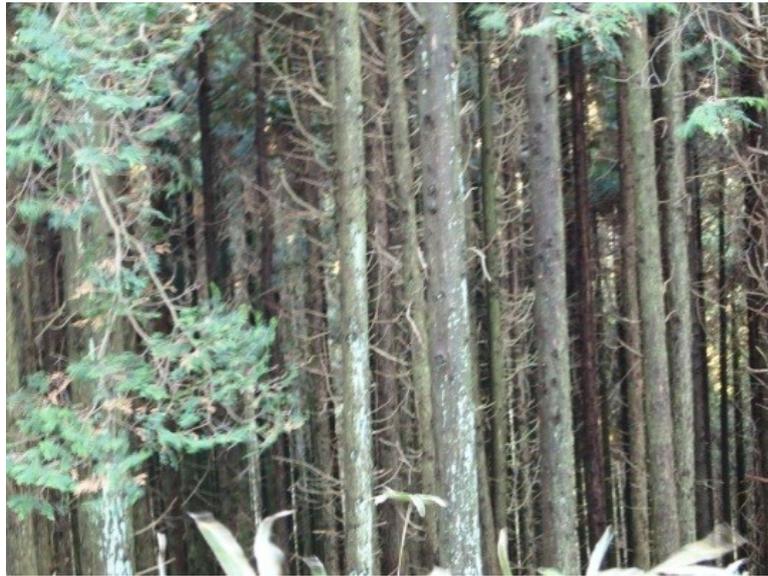
同様にふたつの側面を利用した取り組みはいくつか存在する。再度山には、学習の森や教育キャンプ場といった「文化機能」的な教育施設がいくつかあるが、神戸市森林砂防事務所が主催する「こうべ森の学校」では、学習の森において、間伐体験や木工体験、またそれらの体験による「環境機能」も期待している。これらの活動が十分に「環境機能」としての役割を果たしているか、という点に関しては、やはりボランティアだけでは限界があると考えている。また「環境機能」における防災の役割は、年々低下している⁵¹。これは、緑化計画が始まった際に植樹した木々が、ヤシヤブシなど比較的根の浅い植物であり、近年倒れはじめていることに由来する。しかしそれが、神戸市民に壊滅的な影響を与えるほど危機的状況ではないため、神戸市民にとっては大きな問題意識にはなっていない。海から見える六甲山系の姿は、樹木が山肌を覆っているために一般市民のレベルで危惧されるような状況にあると認識していないのだろう。

また「環境機能」の問題として、放置されている森林の状況も挙げられる。観光客として何気なく登る六甲山系には問題など存在しないように見えるが、実際は拡大造林時に行われた植林の当初の目的利用がほとんどされないまま放置され、非常に暗い森になっているところも存在する（写真次頁上）。

⁴⁹ 神戸市建設局公園砂防部森林整備事務所 高畑正氏聞き取り 2010年10月06日

⁵⁰ 玉起：1997：p.143

⁵¹ 高畑氏聞き取り：2010年10月06日



六甲山にて（筆者撮影：2010.11.20）



企業の施設（筆者撮影：2010.11.20）

企業誘致が盛んだったバブル期までは、六甲山のなかに多くの企業の別荘や研修施設があり（同頁写真下）、それらの施設管理の一環に森林整備が含まれていた⁵²。阪神大震災の影響もあり、多くの企業が撤廃していったが、そのまま廃墟となり、敷地内の森林も放置されているところが多い。また、かつては「『都市経営』の教科書⁵³」とまで

⁵² 高畑氏聞き取り：2010年10月06日

⁵³ 週刊ダイヤモンド特別取材班 2001 『神戸市 都市経営の崩壊—いつまで山を削り海を埋め立て続けるのか』 ダイヤモンド社

絶賛され、部署を越えた議論が活発に行われ、まちづくりに積極的であった神戸市だが、現在は、情報管理の徹底やコンプライアンスなど制約が非常に多く、それに加えて震災後行政の元気がなくなってしまったこと、行政間での議論が容易でなくなったことは、とても残念だと高畑は述べている⁵⁴。かつては世界第 4 位の貿易港であった神戸港は現在は 30 位にも入っていない⁵⁵。阪神大震災で神戸港および六甲山系の受けた打撃は、経済的側面以外にも非常に大きかった。

現在、神戸市が行っているグリーンベルト事業は、土砂災害の防止、都市のスプロール化の防止、景観保護や生物多様性保全、健全なレクリエーションの場の提供などが整備目標に挙げられている⁵⁶。グリーンベルト事業とは神戸市が民有林を買い取ることで、市の管轄地域を増やし、放置される森の面積の縮小を試みる事業である。「環境機能」の役割を充実させるには有用な事業であると考えられる。現在放置されている土地の多くは民有林、つまり個人の持ち物である場所が多く、その土地の整備を神戸市は干渉することはできない。個人の持ち物に対して制約を加えることができないのである。そのため個人所有の放置されている六甲山系の土地を神戸市が買い取ることで、管理しやすくしようとしているのだ。グリーンベルト事業により神戸市の管轄になった土地は以下のとおりである。

⁵⁴ 高畑氏聞き取り : 2010 年 10 月 06 日

⁵⁵ 「図録 世界の貿易港ランキング」ウェブサイト
<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/6680.html> (2010.10.20)

⁵⁶ 「国土交通省近畿地方整備局六甲砂防事務所」ウェブサイト
<http://www.rokko.kkr.mlit.go.jp/business/GB/greenbelt-bus.php> (2010.10.28)



しかし、この大きな山塊を管理する能力が一行政にあるとは言い難い。そこで必要になってくるのが企業、市民団体との連携である。市民団体の在り方について議論をするべき現状があると考えているが、神戸市との連携事業の拡大が必要であろう。西谷寛氏はボランティアで整備することの限界を言及しており、一方で高橋氏はボランティアがプロフェッショナルの専門家集団であり、彼らの可能性について言及している。西谷氏は、個人で里山の保全の活動も行っており、その経験から「ボランティアで広大な土地を整備してもテニスコート2面分くらいの整備が限界であり根本的な解決には程遠い」と述べている⁵⁸。一方、高橋氏はボランティアによる再度山のログハウス造りに関して「水道工事に長けた人、大工や設計ができる人などボランティアだからこそ集まったさまざまな人たちによって作り上げられた」と述べている⁵⁹。ボランティアの限界、という言葉に同意できるが、彼らの可能性を否定することもできない。阪神淡路大震災ではボランティア元年と呼ばれ、多くのボランティアに神戸市民は助けられてきた。ボランティアだからできることやボランティアでもできることもある。事業として、この六甲山系を支えるには、ボランティアの協力も必要であるが、その限界も認めざるを得ないのではないだろうか。

一方で、こういった大きな事業に市民ボランティアの力を借りることで、市民と六甲

⁵⁷ 「国土交通省近畿地方整備局六甲砂防事務所」ウェブサイト
<http://www.rokko.kkr.mlit.go.jp/business/GB/greenbelt-bus.php> (2010.10.28)

⁵⁸ 西谷寛氏聞き取り：2010年04月22日

⁵⁹ 高畑正氏聞き取り：2010年10月06日

山系の関係を創っていくことが可能である。そこに経済的利益に直結するような「生業」がなかったとしても、学校の授業やボランティアなどさまざまな形で行政の試みに市民が参加できる機会を与えることは、神戸市民の一員であることの認識にもつながるため十分に価値のあることだろう。ボランティアの存在が「文化機能」と「環境機能」の両方においてかかわりを持つということは、営みの場の選択肢の拡大につながっている。同時に六甲山系への多様なかかわりを提供しているといえる。経済的利益に直結する生業的かかわりは存在していないが、その他の要素で神戸市民と密接な関わりを持っているのである。

4-1-2. 「生産機能」および3つの機能の関係性

「生産機能」という点では、「薪などの生産」をする機能と定義されている。六甲山系のどの山もその役割を充分には果たせておらず、「生産機能」の定義が「『薪など』の生産機能」という限定的な表記でよいのか少々疑問が残る。キノコ狩りをしている人や山菜を取っている人もいるため、彼らにとって六甲山は「生産機能」を十分に果たしている。しかし、六甲山や再度山では、飯盒炊爨などが一般市民によって頻繁に行われているが、薪は売店で購入することも多い。本節では、「生産機能」をより広義に捉えることで、3つの機能の関係性をより明確にしていきたい。

では、「生産機能」にはどのような役割があると考えられるのか、検討したい。まずは、定義通り「薪などの生産」について考えてみる。「生産活動」のなかに、拡大造林計画の際にやや不本意ながら植樹され、現在放置されている針葉樹林の使い道を、今後の木材需要を期待するような要素を含んでいるのであれば、木材として利用できるだけの条件・環境を整える必要がある。現実には、切り出しに膨大な費用がかかる六甲山系の針葉樹林はとくに活用されず、六甲山系における問題のひとつとなっている。針葉樹林の活用については、諸外国で行われている木材ペレットとしての利用など環境政策の一環として活用する方法もあるだろう。薪ストーブへの注目度やエコハウスなどの取り組みが増えている現在では、六甲山の針葉樹の利用方法が拡大される余地は十分にあると考えられ、企業やNPOの参画など整備が必要とされる側面はあるにせよ、定義通りの「生産機能」の活躍は期待できるかもしれない。ただ、現状はやや厳しいと考えられる。それは、六甲山系特有の地形に起因する。六甲山系は花崗岩で形成されているため、

断層壁から採れる石は上質で「御影石」と呼ばれる神戸の産物のひとつであり、神戸の街の発展にも貢献した⁶⁰。しかしながら、山の南側の傾斜が30~40度のところが多い⁶¹のために、「経済活動」として成立させるには、費用がかかりすぎてしまう⁶²。このような見解は、定義通りの「生産機能」の可能性として理解することができるが、神戸市が提唱する「都市山」という概念のなかで考えられる「生産機能」には、そのような「経済活動」と同義となるもの以外も存在していると考えられる。「生産機能」と「経済活動」の関係が、直結したものとして捉えていては、「生産機能」の可能性を広げることにはできないため、六甲山系の「生産機能」についてももう少し検討したい。

では六甲山系は、「都市山」として、何を「生産」しているのだろうか。筆者が六甲山系を歩いていて、出会った人のなかには、キノコ狩りをする人もいた。どんぐりを拾って遊ぶ子供、その拾ったどんぐりでネクタイピンを自作していた市職員、間伐した木々からキーホルダーを作っている自然保護センター職員にもであった。ハイキングの途中に、拾った落ち葉でしおりを作った女性にも出会った。このように、六甲山系で得た自然物を利用し、自ら加工を加えることで、「思い出」や「作品」へ変換していくのである。このような経験は、六甲山系におけるひとつの有意義な「生産機能」として捉えることができるだろう。そして、それらの経験が上述した「文化機能」への発展につながっていくと可能性にもなる。神戸市森林植物園では、冬になるとリースを作る講座を開くなど、レクリエーション施設としての「文化機能」を、六甲山系の「生産機能」から得ている。「生産機能」の役割を捉えなおすとすれば、人々が六甲山系で活動するなかで得られる自然物との触れ合いを含むことができるだろう。

「都市山」という概念自体は「人と自然の関係」を考えるうえでは、非常にユニークな概念であり、神戸特有の関係性を捉えるには重要なものである。まず、神戸市民と六甲山系は「文化機能」と「環境機能」によって繋がっているといえるだろう。またそれらの基盤となる六甲山系の自然的環境は「生産機能」によって、「六甲山との触れ合い」を生み出し、人々のなかで「六甲山観」を形成する重要な「経験」として取り込まれていくのである。

「都市山」という概念のなかで定義される3つの機能は、不可分に存在し、それぞれが

⁶⁰ 神戸市 2003 『六甲山の100年 そしてこれからの100年』 p.8

⁶¹ 本多静六 1939 「治水の根本策と神戸市背山に就て」神戸市経済部山地課 p.24

⁶² 高橋敬三氏聞き取り : 2010年11月13日

多様な形で連携しあって、「都市山」を形成しているのである。その不可分な存在の在り方が、神戸市民と六甲山系とのかかわりの礎になっている。「生産機能」の理解をより丁寧に、広義に理解することによって、それぞれの機能の関係性が明らかになり、都市における人と自然の関係を作り出す重要な概念として捉えることができるのである。

4-2. 里山としての六甲山

六甲山は、かつて薪炭林として活躍した「里山」であった。里山の定義は、一般に理解されている「人と自然がお互いに影響を与えながら成り立ってきた二次的自然⁶³」としておく。過剰利用によって禿山となり、その後の植林活動によって現在の山の姿がある。農村地域に見られる生活の糧を得るようなかかわりは、現在はほとんど存在していないが、「遊び仕事」という枠組みで捉えることができるようなかかわりは多く存在している。たとえば、「環境機能」に分類されるような、ブナの保存活動である。現在、六甲山で行われている市民活動の多くは「環境機能」に関するものが多い。たとえば、六甲山頂付近に残るブナの原生（約 130 本）が残っており、その保護活動の一環として市民団体の「ブナを植える会」によって植林が行われている⁶⁴。山頂付近は特別保護区域に指定されているため、ほぼ放置されており、温暖化が関係している可能性も指摘されているが、新しい芽が育たず、他の植物に生きる場所を奪われつつある⁶⁵。そのため、「ブナを植える会」の人々は、区域外での植樹を行っている⁶⁶。特別保護区域内手を加えられるような特別な許可を認める「制度はあるが、六甲山系は白神山地や知床のような重要な生態系や景観ではなく対象外になってしまう⁶⁷」ため、現状では放置状態となっている。

このような活動は「遊び仕事」としての要素は、従来論じられてきたものよりも、比較的希薄かもしれないが、多様なかかわりのひとつの事例として、NPO 団体による六甲山系へのかかわりのあり方は、「都市山」の概念においては、「環境機能」「生産機能」「文化機

⁶³ 宮崎雅雄ほか 2004 「多摩丘陵におけるフットパス計画による里山景観保全への取り組み」『ランドスケープ研究』68 (2) p.127

⁶⁴ 「ブナを植える会」ウェブサイト <http://www.bunawouerukai.jp/index.html> (2010.05.11-2010.12.03)

⁶⁵ 神戸市建設局公園砂防部 2005『六甲山地・再度山の森林のむかしといま 再度山永久植生保存地調査解説』 p.6

⁶⁶ 「ブナを植える会」ウェブサイト <http://www.bunawouerukai.jp/index.html> (2010.05.11-2010.12.03)

⁶⁷ 高畑氏聞き取り : 2010 年 10 月 06 日

能」のすべてを果たしうるものとして評価することができるだろう。

「都市山」六甲山系における「営み」の多様性は、おもに 3 つの機能に関連するものである。そこで行われるさまざまな活動は、「営み」として捉えることができる。それは、「公園緑地」のように、管理・維持という機能的な側面だけでなく、さまざまな「生産」をもたらすものであるし、自然的環境への相互的やりとりに由来する。これらの活動の基盤となっている要素として、六甲山系のオープンさが挙げられる⁶⁸。都市山のすべての機能が、特定の人々に限定されて担われているのではなく、人々がどのようなかたちでかかわっていくかを、それぞれに委ねられているオープンさに大きな特徴があるといえるだろう。これは、六甲山系自体が、地元住民のみが利用できるような入会的要素があるわけでもなく、施設に限定されたかかわりがあるわけでもない、開かれた山であることが、「都市山」の機能に充実をもたらしていると考えられる。

また「里山」として利用されていた時代とは、その利用形態が大きく変化しているが、「六甲山系は、神戸市が提唱した「都市山」であるが、その実態は「里山」の新しい在り方を示しうるものとして評価できると考える。

4-3. 行政区分の「公園」と神戸市民にとっての六甲山系

六甲山系を「自然公園」として捉え、その機能性に着目した「都市山」という概念とその分析を記述した。玉木彰三は、六甲山博物誌のなかで「今の六甲山は私たちが私たちのためにつくり育ててきた公園です⁶⁹」という表現を使っている。確かに広義に見れば、「公園」と呼べるかもしれない。しかし、「公園」という言葉だけでは、捉えきれない機能と関係性が六甲山系と神戸市民には含まれている。

「公園」とは、「造営物公園」と「地域性公園」に分類され、「造営物公園」は国営の造営物公園（都市公園・国民公園など）と、地方公共団体の造営物公園（都市公園、その他特定地区公園など）に分けられる。「地域性公園」は、国立公園・国定公園・都道府県立自然公園である。地域性公園は自然公園法に基づいており、公園として指定することで、土地利用の制限などによって自然景観を保全することを主な目的とするものである⁷⁰。これら

⁶⁸ オープン性については、4-5. で詳述する

⁶⁹ 玉起：1997：p.136

⁷⁰ 都市公園法ウェブサイト

の分類だけで判断すると六甲山系は地域性公園となり、「公園」として分類されることになる。

神戸市は、六甲山系を「都市山」と新たな定義付けを行うことで、巨大な都市近郊の自然公園としてその役割に大きな期待をしているし、事実、六甲山系は、1956年5月10日に瀬戸内国立公園に編入されており、「公園」という名称は獲得している。しかし、これは、日常生活において、周辺住民が意識する「公園」ではなく、より広義に「自然」の利用方法を捉えた結果といえる。神戸市にとって国立公園の編入は多年の悲願であったし、六甲山系の開発を急ぐ当時の時代背景からも国立公園の編入は六甲山系に今までは異なった価値を与えるものであった。しかし、六甲山と神戸市民の関係を探る視点から考えると「国立公園」という名称を与えられたにすぎず、市民が日常的に利用する「公園」とは違う位置づけにあるといえる。

神戸市が持っている「公園」と六甲山系へのイメージの相違をより詳しく分析するために、神戸市民を対象にした意識調査を参照したい。神戸市が行った神戸市民1万人アンケート⁷¹では、「身近な公園⁷²」の利用方法求めるものについて回答者の63.9%が「自然とのふれあい」と回答している。また「公園の効果」としては、「防災：災害時の避難所、火事拡大の防止(61.1%)」や「景観：まちの風景を美しくする(52.9%)」が重要であるという回答結果となっている。このアンケートは「地方公共団体の造営物公園」を対象とされたものであり、六甲山系は含まれていない。「公園」に求めるものとして、「自然とのふれあい」と回答した人が多い一方で、「神戸市民全世帯アンケート報告書」では、1年間で訪れた山に関する調査で、37.9%の市民が一度も山を訪れていないと回答している⁷³。つまり「公園」に『自然』とのふれあいを求める一方で、60%以上の人々が六甲山系のなかに足を踏み入れている。そして、その目的に「自然との親しみ」を目的とした人が54.5%にのぼるのである⁷⁴。六甲山系へ訪れるその他の目的としては、「遊び(32.7%)」「健康増進(33.3%)」となっている⁷⁵。「遊び」に関しては、その詳細が記されていないため、「遊び」の内容が常に「自然とのふれあい」によるものであるとは言い切れないが、「健康増進」のために行わ

<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S31/S31HO079.html> (2012.10.5 ; 2013.01.27)

⁷¹ 神戸市民1万人アンケート 2007 p.44 神戸市市民参画推進部広報課が実施。調査期間は平成19年9月28日から10月15日で、対象者は20歳以上の神戸市民としている。

⁷² アンケートでは家から歩いていくことができる範囲にある公園と定義されている。

⁷³ 神戸市土木局緑地部計画課自然環境係 1988 『神戸市の森林利用管理』 p.62-64

⁷⁴ 同上：p.63

⁷⁵ 同上：p.63

れる六甲山系での活動は主に登山である。これもまた「自然とのふれあい」に含むことができるだろう。だとすると、六甲山系に足を運ぶ人々のほとんどが「自然とのふれあい」を目的としていることになる。「公園」に「自然とのふれあい」を求めながら、六甲山系に「自然とのふれあい」に行くのである。「公園」にはない「自然のふれあい」を六甲山系に求めていると考えられる。すなわち「公園」における「自然とのふれあい」の「自然」の延長線上に六甲山系が位置づけられているということである。行政区分として六甲山系を「公園」として捉えることはできても、実際に神戸市民にとっての「公園」とは、歩いてすぐのところにある「普通公園」を指している。そのため、六甲山系を「公園」として認識しているわけではない。しかし、自然的環境としての存在認識は、「公園」の「自然」から六甲山系の「自然」へと広がりを見せる。神戸市民にとっての六甲山系は「公園」に求められる「自然」の延長線上にありながら、行政区分としての「公園」ではないということである。

また「神戸らしいみどり」とはどのようなものがあるかという質問に対しては、「六甲山を中心とした山並み」が86.1%であった⁷⁶。六甲山を公園として認識しているというよりは、ひとまずは、景観として認識していることがわかる。そして、第1回神戸市民意識報告書の観光に関するアンケートでは神戸を訪れた人を案内したい場所として六甲山系は、著しく高い比率を占めている⁷⁷（残念ながらその具体的数値を示した資料はなく、アンケート結果をうけた概要による）。高層ビル街などから以外であれば、だいたい視界に入ってくる存在である。南北に走る道路の先には六甲山脈がある。いやおうなしに視界に入ってくる六甲山系は、まさに神戸市民にとっては、誇るべき象徴的な存在である。その意識がこのアンケート結果に反映されているといえよう。神戸市民にとって、六甲山は「公園」ではなく、「神戸らしいみどり」を象徴する存在なのである。

4-4. 景観としての六甲山系

六甲山は、いつでも北を向けば、そこにある。芽吹き始めた新芽とともに、下界とは少し遅れて、薄いピンクの山桜がドットを描く。5月には、山は一回りも大きくなり、鮮やか

⁷⁶ 神戸市民1万人アンケート 2007 p.54

⁷⁷ 神戸市土木局緑地部計画課自然環境係：1988：p.62 （アンケートの詳細はなく、本文中の記載文のみ）

な緑が咲く。秋ごろには山頂付近から徐々に赤や黄に染まった木々が南へと下ってくる。冬には大半の木々が葉を落とし、薄いグレーがかった茶色の山肌へと変化する。四季の変化を如実に表現してくれる。普段から六甲山に登っている T 氏（60 代男性）は、「通勤途中になあ、電車乗るやろ。ほんなら山のほう見るねん。きれいやなあとと思うだけでな、今日も頑張るかーと思うわけや。5 月とか最高やな⁷⁸」と話す。冬になり、山頂付近が白くなっていると、学校の先生や近所の人、家族と「今日は山、雪積もったなあ」という会話が交わされる。六甲山系の変化は、日常的な会話にもよく登場するのである。

神戸市には、都市景観条例がある。神戸の景観を守るべく昭和 53 年に制定されている。その後、幾度か改正され、平成 16 年に「景観法」が制定され、景観法活用のために条例改正等も合わせておこなっている⁷⁹。古くから、神戸市と神戸市民は、海からみた六甲山系の景観を守ろうとしてきた。都市景観形成地域が指定されており、『『みなと神戸』の顔である都心ウォーターフロントに位置する次の 6 地域を、平成 19 年 8 月に、都市景観条例により都市景観形成地域に指定⁸⁰』したとある。



（ポートアイランドしおさい公園からの眺め 「神戸市」ウェブサイト掲載）

平成 20 年 2 月には、市民公募により「神戸らしい眺望景観 50 選」を選定し、平成 22 年 7 月には、都心部モデル地区における眺望景観を保全・育成するための施策として、建築物等の高さ・幅に関する誘導基準を設けている⁸¹。このようにさまざまな法整備などによって、

⁷⁸ T 氏聞き取り 2012 年 10 月 30 日

⁷⁹ 「神戸市」ウェブサイト

<http://www.city.kobe.lg.jp/information/project/urban/scene/kobesinokeikanmachidukuri.pdf> (2012.11.23-2013.01.25)

⁸⁰ 同上

⁸¹ 「神戸市」ウェブサイト

<http://www.city.kobe.lg.jp/information/project/urban/scene/kobesinokeikanmachiduk>

六甲山系の景観は守られてきたのである。

さて、ここまで「景観」という言葉を、定義づけを行うことなく、使用してきたが、ここで、「景観」という言葉の意味について少し考えておきたい。

渡辺貴史・寺田徹・横張真は、景観を以下のように分類している。

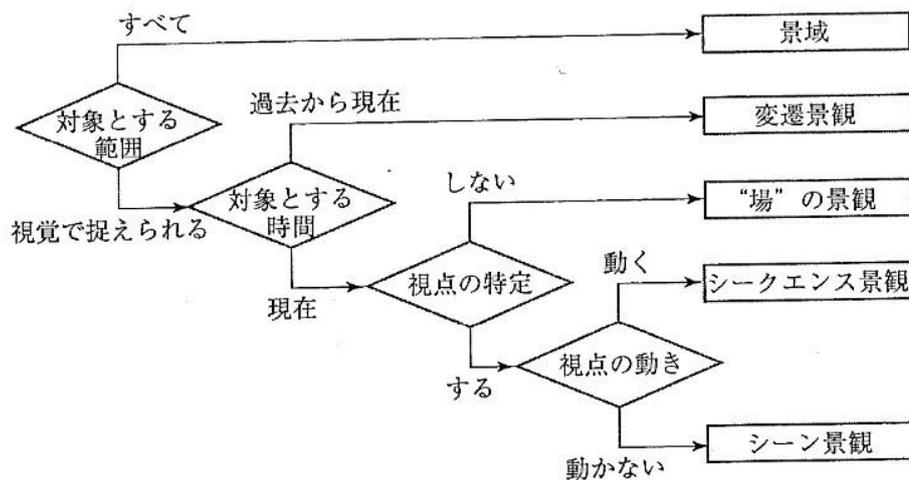


図 3.26 景観の分類

82

「景観」の対象とする範囲が、環境すべてなのか、視覚で捉えられるもののみ限定されるのかによって、呼び名が変わり、対象とする時間、視点の特定、視点の動きによってタイプ分けがなされている。また「過去から現在までの積み重ねが今に見られる景観に反映されていると考えると、過去の景観と現在の景観は深い結びつきをもっているといえる⁸³」と述べ、それぞれの景観は、独立したかたちではなく、相互的に結びついていると説明する。彼らは郊外緑地景観を考える際に、郊外緑地保全の目的のひとつである「視覚で捉えた地域の生活環境の総和」としての生活環境保全を軸に、景観を捉えている。そして、『「視覚で捉えた…」』と記述されていることから、望ましい郊外緑地景観は、視点が特定された景観、すなわちシーン景観とシーケンス景観から考えるとよい」と述べている⁸⁴。また、その景観が「多くの人々にとって望ましいと考えられる視覚的特徴」の条件を満たせばよい景観といえるのか、という疑問を投げかけ、景観としての「好ましさをいくつかの指標の数値として表現しそれにもとづいて整備することは、郊外緑地景観の一定の質を確保す

uri.pdf (2012.11.23-2013.01.25)

⁸² 横張真/渡辺貴之 (編) 2012『郊外の緑地環境学』朝倉書店 p.150

⁸³ 同上 : p.149-150

⁸⁴ 同上 : p.150

ることには役立つ」一方で、「味気ない景観になるおそれがある」とも指摘する⁸⁵。そこで、彼らは、景観に愛着を持つことの重要性を指摘するのである⁸⁶。この愛着の形成要因は、①思い出②自己表出性③地域での交流を挙げている。①思い出は「景観そのものと、ともに行為に配慮することで、景観がはっきりとした思い出として呼び起されることになり、景観と人との結びつきを強くすることに貢献⁸⁷」し、②自己表出性は、景観づくりにかかわり、それによって自己を表現することが、景観に対する肯定的な感情を生じさせるし、③地域での会話などを通じた交流が、景観に愛着をもたらすきっかけとなる可能性を論じている⁸⁸。

景観に愛着を持つということはきわめて重要な要素であると考ええる。愛着を持つ景観となるためには、愛着を育むなんらかのプロセスが必要となる。渡辺・寺田・横張は、郊外緑地景観は「視覚で捉えられるもの」とし、シーン景観とシークエンス景観から愛着の議論を展開しているが、①思い出というのは、時間とのかかわりが大きく関係している。彼らは思い出となる景観を、居住者との距離と出現頻度から分析し、居住者と景観の距離が近いほど思い出として呼び起されるとの考えを示しているが、その場合の対象となる「景観」は、シーン景観とシークエンス景観だけでよいのだろうか。時間とともに変遷していく「変遷景観」が含まれていない。もちろん、歴史性を知らずとも、自らが住むまちに愛着を持つことは、可能であろう。しかし、それはどのまちに住んでも生まれうる愛着であり、地域の固有性に起因したものになりにくい。②自己表出性および③地域での会話などを通じた交流から耳に入るその地域の歴史や人々が関わり続けてきた活動、自然的環境の構成要素などさまざまなことを知るなかでその地域・景観への愛着が生まれるのではないだろうか。本研究では、六甲山系の歴史性がもたらす神戸市民の「自然観」の形成も視野に入れているため、六甲山系をシーン景観とシークエンス景観に限定しない立場をとりたい。

六甲山系をシーン景観とシークエンス景観としてのみ捉えることは、神戸市民との関係を考えるうえでは限界があると考えられる。その理由は 2 つある。ひとつは、六甲山系には人々がかかわり続けてきた歴史があるからだ。かかわりを続けてきたからこそ、現在の六甲山系が景観として存在している。その点から、景観をシーン景観とシークエンス景観に限定することには懐疑的立場をとらざるを得ない。もうひとつの理由は、神戸市民にと

⁸⁵ 横張ほか：2012：p.166

⁸⁶ 同上：p.166

⁸⁷ 同上：p.170

⁸⁸ 同上：p.171

って、六甲山系は、都市景観を形成する役割だけではないということである。昭和 55 年度の「神戸市民全世帯アンケート報告書」によると、1 年間で訪れた山に関する調査で、37.9% の市民が一度も山を訪れていないと回答している⁸⁹。逆に言えば、62.1% が何らかの形で山へ入っているのである。神戸市民にとって六甲山系とは「視覚として捉える」景観だけではなく、自らがそこに足を踏み入れる「場所」なのである。

六甲山系が「景観」以外にどのように捉えられているのか、また愛着の形成がいかに行われるのかは、第 8 章の聞き取り調査から分析を試みる。神戸市民は、六甲山に足を踏み入れる機会がきわめて多いわけだが、どのようにして、足を踏み入れる機会を獲得してきたのだろうか。次節では、公園でもなく、景観以上の働きをする六甲山の開かれた場所性について考察する。

4-5. オープンな場所としての六甲山系

「公園」でもなく、従来の里山とも異なり、ただ視界に入る「景観」でもない六甲山を支える重要な要素にあげられるものとして 4-2. で触れた「オープンさ」がある。オープンであるとはどういうことなのだろうか。現在の六甲山系を造るきっかけを作った A・H グループや本多静六、企業および行政は、六甲山とのかかわりのあり方を利用者である神戸市民にゆだねている。彼らは、山を一定の人物や企業の「所有物」として認識していない。かつて六甲山系にもあった入会地は、政策的・制度的な要因とともに、大部分が近代的生産（経営）に適した権利形態をもたなかったことと、慣行的拘束に縛られていること、新しい生産技術の導入および資本・労働の障害となっていたことを理由に明治期に撤廃された⁹⁰。また社会経済的意義の変化により、農林地としての役割が後退し収益林としての役割が重要になってきたことなども入会権撤廃の要因として挙げられている⁹¹。このような時代背景のなかで、後述する行政・企業（阪神・阪急）の六甲山経営の展開とともに、六甲山系の役割と意義が変化してきた。現在に続く六甲山系のオープンさは、入会権が撤廃される前の「共有地」とは異なった「共有地」的要素が含まれるようになったのである。その発展の礎となったグループや、行政・企業、本多らの禿山であった六甲山系を蘇らせる活

⁸⁹ 神戸市土木局緑地部計画課自然環境係：1988：p.62-64

⁹⁰ 川島竹宜ほか 1954 『入会権の解体』 岩波書店 p.2

⁹¹ 洲脇一郎 不明「六甲山の入会林野の解体」『歴史と神戸』14号 神戸市史学会 p.99

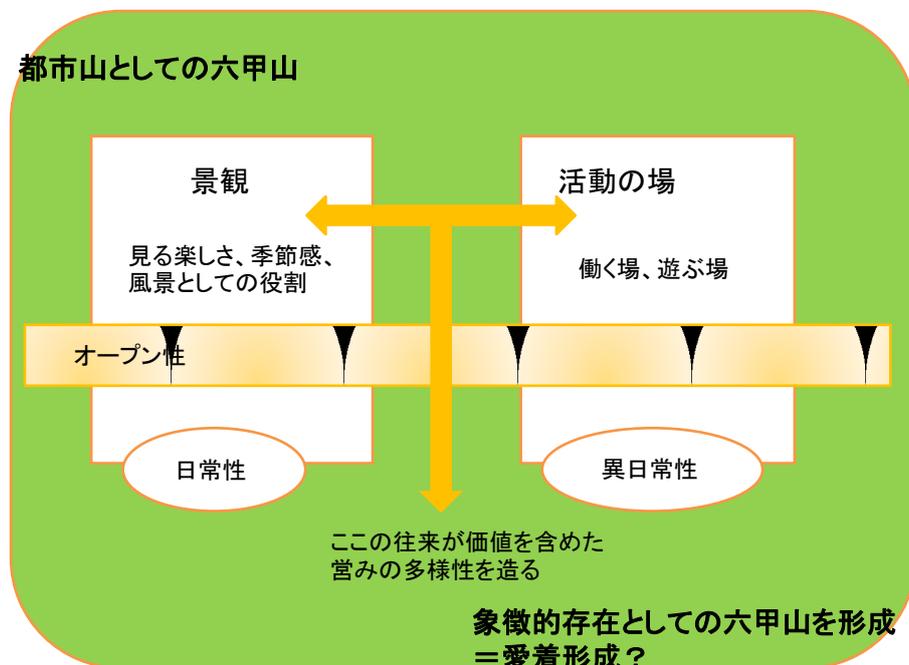
動が、オープンさの構築をはっきりと意識したものであったかどうかは定かではないが、従来から市民に利用されていた山の在り方を、今まで違ったかたちで残したことが重要なのである。企業が介入することで、山をテーマパーク化し、利益目的に開発することも十分可能であった。もちろん企業の運営する施設は、六甲山系のなかにはいくつかある。しかし、彼らの運営する施設は、六甲山系を彼らの所有物としてのみに展開されたものではなく、六甲山系に人を呼び込むためのきっかけにもなる開発を展開している。企業や市営の施設は、市民にとっての選択肢のひとつなのである。企業や行政が現在のかたちで六甲山系にかかわっているのは、「里山」としての歴史だけが要因ではない。禿山から六甲山系を蘇らせた本多静六やグループが残した「山の楽しみ方」も大きく影響している。これらについては後述するが、ここでは、六甲山系が持つオープン性の役割についてももう少し詳しく見ていきたい。

オープン性を持った緑地として挙げられるものに先行研究で触れた「公園」やフットパスが挙げられる。とくにフットパスは、市民が獲得とした「権利」として、富裕層や一定の集団にのみ解放されてきたものを庶民のレベルにまで、「緑地」の楽しみを拡張させたものであった。また「公園」は、日本においては社寺境内地等の宗教的な意味合いを持ったある意味で限定的であった場所や、江戸時代に将軍や藩主によって創設された場所を、その利用価値自体を拡張することによって新たなる役割を与え、近隣住民の「公園」として獲得してきたものである⁹²。

しかし、六甲山系とは、神戸市民にとって「公園」ではなく、またフットパスのように市民が獲得した「権利」でもない。いつでも足を運ぶことができるオープンさを持った「身近な存在」なのである。それは、日常の延長線上にありながらも、普段利用する「公園」とは異なる日常を与えてくれる。自宅から遠くにあり、休暇を取って足を運ぶことで得られる「非日常的」な場所ではなく、いつも視界に入る「景観」のなかに足を運ぶことで得られる、日常とは異なった「異日常」な場所なのである。その異日常な場としての六甲山系と日々の生活のなかで視界に入る「景観」としての六甲山系の間には、六甲山系特有のOPEN性という要素が横たわっている。その開かれた山のなかに日常性と異日常性が存在し、それぞれを往来することで、六甲山観が形成されると考えられる。それぞれを往来することで、「公園」とも異なり、「景観」として楽しめ、また景観以上の役割を持った「遊び場」や「働く場」としての六甲山系が、多様な価値観と営みの多様性をもたらしている。

⁹² 石川：2001：p.192

その多様な価値観と営みが神戸の「象徴的な山」として認識されていると考えられる。



(図1:「都市山としての六甲山系」:筆者作成)

次章では、従来の里山を超えた広がりを持ち、行政区分によって定義される「公園」とも異なり、「景観」だけではない、異日常で身近な六甲山がどのようにして作られてきたのか、外国人を中心に開発されてきたその特異な歴史から探っていく。

5. 六甲山系開発の歴史、A・H グループ

5-1. 開祖、A・H グループ

神戸港は1868年（慶応3年）に開港⁹³し、同時に外国人居留地が設けられ多くの欧米人が居住⁹⁴し、欧米人たちは神戸の発展に大きな影響を与えた。居留地に移り住んだひとりである英国出身のA・Hグループは居留外国人社会の中心人物のひとり⁹⁵でもあり、六甲山の発展に欠かせない人物である。1968年にグラバー商会の出張員として来神したのち、日本人の宮崎直と結婚している。彼は「六甲山村長」や「六甲山開祖」と呼ばれ、顕彰碑も建てられるほど神戸の人々に親しまれた人物であった。顕彰碑は第二次世界大戦時に「外国人のもの」だというだけの理由で壊されたが、1955年（昭和30年）に「六甲山の碑」とグループの胸像が再建された。毎年夏になると六甲山の夏山の安全を願う「グループ祭」が行われている⁹⁶。このようにグループは現在もなお神戸の人々に親しまれている。

グループは狩猟を好み、六甲山に魅せられて別荘を建築するわけだが、このとき別荘周辺地区は、都賀野村、六甲村、篠原村及び八幡村の共有で、4つの村の総代が年番で管理していた⁹⁷。グループは、「六甲村の総代と御東明村の宮崎氏（中略）の名を借りて土地借入を行ったものと思われる」⁹⁸。明治28年3月から開墾をはじめ、6月には別荘が完成しており、その後見晴らしのよい場所を見つけては友人に別荘建築を勧めており明治33年には、「外国人居留地のようであった」と記されている⁹⁹。

グループの六甲山開発は、軽井沢におけるアレキサンダー・クロフト・ショーの別荘が建てられてからわずか8年後に始まっている。軽井沢における開発は、キリスト教的であ

⁹³ 「神戸市」ウェブサイト

<http://www.city.kobe.lg.jp/life/access/harbor/rekishi.html> (2010.07.11 ; 2010.10.22)

⁹⁴ 「神戸旧居留地」ウェブサイト

http://www.kobe-kyoryuchi.com/kobe_kyoryuchi/miserarete/index_rekishi.html
(2010.09.09)

⁹⁵ 神戸市 2003 「六甲山緑化100周年記念 六甲山の100年 そしてこれからの100年」
p.10

⁹⁶ 同上：p.12

⁹⁷ 山本吉之助 不明 「明治以後の六甲の変遷」『歴史と神戸』4号 神戸市史会 p.19

⁹⁸ 同上：p.19

⁹⁹ 同上：p.19

ったため、女性の外出時は白足袋を義務付けるなど規制があったのに対し、グルームの開発は、規制などはなく、きわめて日本的であったとされている¹⁰⁰。

5-2. 六甲山の荒廃とグルームの活動

明治時代初期は、六甲山だけでなく六甲山系全体が荒廃していた。荒廃は、明治時代が始まったころに入会権が撤廃され、ほぼ無法地帯となっていたために進んだとされていたが、江戸時代から乱伐されており、入会権の撤廃が追い打ちをかける形となった¹⁰¹。

入会権の撤廃に至った要因を新修神戸市史編集室の洲脇一郎は、3つの要因があるとしている。まず、政策的な政策的、制度的要因、第二に入会林野自体の社会経済的意義の変化、第三に村落構造の変化にあるとまとめている。政策的、制度的要因については、林野に対する地券の交付、項融資の官民有区分と地租改正、町村制の制定とそれに付随する町村合併、戦後の部落会解散に関するポツダム政令、入会林野近代化法の変令など林野開発の諸政策が影響しているとした。加えて、近代的な権利形態をもたないことや旧来の慣行的な協同体拘束にしばられていること、新しい生産技術の導入および、資本・労働の投下の障害¹⁰²になっていたと述べている。二つ目に挙げられた入会林野の事態の社会経済的意義については、「商業的農業が展開し肥料を購入するようになると、(中略)林野の農用林としての役割が後退し、収益林(経済林)としての意義が重要¹⁰³」になってきたとし、さらには高度経済成長期における土地需要の増大のために林野の地盤そのものが大きな意義を持つようになったと述べている¹⁰⁴。また大都市近郊における入会林野の解体の特徴は、その他の地域と比較しても時期的に早い段階で行われてきたこと、解体の要因の一つが土地需要にあることだと指摘する¹⁰⁵。最後に社会経済の発展が生活共同体としての村落の構造を変化させ、「共同体意識が稀薄化し、また有力地主層は植林や個人の林野への分配を有利と判断¹⁰⁶」したとしている。次頁の写真は、それぞれ神戸港開港直後の六甲山系の様子と植林事業がなされる前の六甲山系の一部である。

¹⁰⁰ 山本：不明：p.20

¹⁰¹ 高橋氏聞き取り：2010年06月18日

¹⁰² 川島：1954：p.2

¹⁰³ 洲脇一郎：不明：p.99

¹⁰⁴ 同上：p.99

¹⁰⁵ 同上：p.99

¹⁰⁶ 同上：p.99



開港式 開港直後の神戸(神戸市立博物館蔵)

神戸港開港直後の六甲山¹⁰⁷



六甲山植林前¹⁰⁸

¹⁰⁷ 神戸市立森林植物園にて撮影 2010年06月05日

¹⁰⁸ 神戸市：2003：p.31

また、六甲山系の荒廃は、以下の写真で確認することができる。



神戸大学教育研究センターの松下まり子氏が、1887年（明治20年）の参謀本部陸軍測量曲の地形図から当時の植生を再現した六甲山系の荒廃の様子。黄色い部分が荒地で、黄色い部分の中にある水玉は岩石山、岩石崩落場所を示している。また左上表3つめは土砂崩落場所を示している¹⁰⁹。（撮影者：すべて筆者：2010.06.05）

入会権の撤廃は、従来共同的に管理されていた六甲山系の在り方を変化させたものとして捉えることができる。しかし、これは六甲山系に限ったことではなく、明治期においては、他の地域にも見られたことである。六甲山系の特色は、早期の入会権の撤廃にあったのではなく、その後のかかわり方が、従来維持されてきた入会的な要素とは異なった側面で展開されてきたことにあるだろう。その点でグループの諸活動は、現在の六甲山系と神戸市民のかかわりに大きな影響を与えていると評価できる。

グループは、登山道も十分でなかった六甲山上に登るために私財を投じて登山道を整備し、日本で最初の公式ゴルフ場を開拓するなど、レクリエーション要素の高い山をつくり上げようとした一方で、当時の兵庫県知事服部一三に砂防や植林の大切さと説いたとされ

¹⁰⁹ 神戸市：2003：p.15

る¹¹⁰。レクリエーション事業、六甲山の開拓に力を入れていたグループは積極的に行政にも働き掛けていたのである。

かつての狩猟による殺生を悔い、六甲山を開拓し神戸の人々の役に立つことの決心をしたというグループ氏は、自らを率先して植林、砂防工事、道の改修、当局への交渉などを行い、七十三歳の生涯を終えるまで六甲山を愛し、六甲山で遊び、その楽しさをみんなに分け与えたのです¹¹¹。

玉起彰三は、『六甲山博物誌』でこのように述べているが、実際にグループが植林したのは、三国池付近の山荘周辺からゴルフ場までの並木道程度ではないかといわれている¹¹²。グループが植林を行った規模は小さいものであることから「六甲山開祖」と呼ばれる大きな理由は、植林活動ではなくゴルフ場やアイススケート、クロスカントリーなど遊びの場を提供したことにあるといえる。つまり、薪炭林としての価値もなく、雨が降れば土砂が流れ出るその山をレジャーや憩いの場として「新しい価値」を与えることになったのだと考えられる。



三国池



三国池周辺の山道

(撮影者：すべて筆者：2010.12.03)

¹¹⁰ 神戸市：2003：p.11

¹¹¹ 玉起：1997：p.143

¹¹² 高橋氏聞き取り：2010年06月18日

「しかし時の政情不穏から（中略）混乱した時代背景の中、日本人と外国人との紛争を避けるために、外国人居留地は当時の兵庫の市街地から 3.5km も東の砂地と畑地であった神戸村に造成されることとな¹¹³」った。居留地がわざわざ市街地から離れた場所に設けられていることから、神戸市民と居留地に住む欧米人との間に問題が生じることを懸念していることがわかる。つまり「神戸の人だから」といって簡単に外国人の存在を受け入れることができたわけではなく、貿易港として栄える一方で、外国人居住者との間に少なからず軋轢があったことも推察できる。しかし、グループが、宮崎直という日本人と結婚し、六甲山の自宅に友人を招いたり、さまざまな手法で開拓したことで、六甲山を憩いの場としてレクリエーション要素の高い山をつくってきた。それが外国人と神戸の人々、また六甲山を繋ぐきっかけになった。一方で砂防や植林の大切さを説いたとも述べたが、グループはどのような六甲山の姿を目指したのだろうか。

5-3. グループが目指した自然

現在は生物多様性条約締約国会議でも注目されるなど世界的に「里山 (satoyama)」への関心が高まっている。生物の多様性だけでなく、持続可能性という点でも高く評価されているし、その地域の自然から営まれる生活や想像される文化の連続性についても興味深い人と自然の関係といえるだろう。しかし、グループが目指した六甲山は、薪炭林としての役割の復活や六甲山から生活の具体的な営みをつむぎだすような関係ではなく、「人々が六甲山を楽しむこと」であった。グループに関する書籍の多くには、「グループは自然を愛し、六甲山を愛した」という内容が多く記されているが、彼の自然への愛情は、その他の生物との共生に向けられたというよりも、いかにして「六甲山を楽しむか」ということに向けられたものである。それは現在の六甲山において、薪や食材を得る営みとは異なる「利用価値」を創造した大きなきっかけになっている。

「里山」とは「集落の近くにあり、かつては薪炭用木材や山菜などを採取していた、人と関わりの深い森林¹¹⁴」であるとされ、六甲山系もかつて薪炭林としてかかわりのあった森林であるといえる。里山として機能していた時代の過剰利用が六甲山を始め多くの他地

¹¹³ 「神戸旧居留地」ウェブサイト

http://www.kobe-kyoryuchi.com/kobe_kyoryuchi/miserarete/index_rekish.html
(2010.10.18 ; 2010.10.24)

¹¹⁴ 大辞林

域の里山を禿山としてしまった。土砂災害や水害をもたらす禿げ山を放置することもできなかった人々にとって、グルームがもたらした新しい山の利用方法は、それまでの「里山」とは異なった新しい関係の礎となるものであった。それは従来の「里山」としての役割以上のものを六甲山に見出す結果となり、現在の「都市山」を形成する重要なターニングポイントであったと評価できる。

山に登り、紅茶を飲み、トーストを食べるというイギリス風の文化を神戸の人々は真似をするようになり、現在もなおその文化は神戸の地に根付いている。かつて木材を調達しに山へ入ったときも、仕事の合間にご飯を食べることはあったはずだが、ご飯を食べること自体が目的でなかっただろう。グルームをはじめとする外国人は、「山を楽しむ」という今ではごく普通になった新しい山の文化を持ち込んだのである。

6. 六甲山系開発の歴史、行政・企業

グルームが六甲山の開拓を始めてから、110年ほど経っているが、グルームが死去した後にも企業や行政によって、六甲山系の開発は進められてきた。

グルームをはじめとする、外国人を中心に開発されてきた明治維新から30年間の交通機関は、五毛天神あたりから徒歩で山頂を目指すというものであった。まもなくして、籐の寝椅子に簡単な屋根をつけたような奇妙な籠ができ、五毛天神前から山頂を目指した¹¹⁵。しかし1905年（明治38年）阪神電鉄の大阪神戸間が開通し、沿線の大石駅、新在家駅を利用する登山者が増えたことにより、籠もここから六甲山へ登るようになった¹¹⁶。ついで1920年（大正9年）には、阪神急行電鉄（阪急）が上筒井まで開通し、市電と連絡するようになったため、阪神大石駅や阪神新在家駅より北部に位置する阪急六甲駅から登山する者が急増し、籠屋の多くは阪急六甲へと移動していった¹¹⁷。その後、1925年（大正14年）に六甲山へ直接登ることができる摩耶ケーブルが開通したが、終点が摩耶山の7合目付近のため、六甲山へのアクセスにはあまり便利ではなかった。そのため六甲山登山者の利用は少なかったようだ¹¹⁸。

昭和に入り、六甲山に人を運ぶために整備された道路は表六甲ドライブウェイだった（1929年、昭和4年開通）。戦前の六甲山は、人を山頂に手軽に運ぶための交通手段の整備が「ちょっとした観光ブーム¹¹⁹」の始まりだった。1931年（昭和6年）には、阪急のロープウェイ、1932年（昭和7年）には、阪神系のケーブルカーが営業を開始している。

これらの交通機関は1938年（昭和13年）の阪神大水害によって完膚なきまでに寸断、破壊された。大水害のあと、ケーブルカー、ロープウェイはいち早く復旧されたので、ロープウェイまでの道は比較的早く復旧されたが、それから山上への道路はまったく手つかずのままであった¹²⁰。1943年（昭和18年）、ロープウェイは第二次世界大戦の影響で営業中止となり、金属回収のために撤去され、観光の灯も消えていった¹²¹。

¹¹⁵ 山本：不明：p.21

¹¹⁶ 同上：p.21

¹¹⁷ 同上：p.21

¹¹⁸ 同上：p.21

¹¹⁹ 神生秋夫（不明） 「神戸市有料道路物語」『神戸の歴史』3号 神戸市史学会 p.1

¹²⁰ 同上：p.3

¹²¹ 神戸市：2003：p.24

終戦の 2 年後には六甲山観光交通委員会が結成され、六甲山の観光事業へと再び動き出す。1952 年（昭和 27 年）ごろには、「全国的に国立公園や国定公園の設定整備が競われるようになり、観光ブームの兆しが見え始めた¹²²」こともあり、有馬温泉の旅館業者が中心となり、官民一体となって、瀬戸内国立公園の編入に向けてキャンペーンを行った。1955 年以降に六甲山の国立公園への追加指定が確実視され、編入に伴う観光ブームを予見して、山頂の観光施設の新設、ケーブルカー以外の交通手段の検討などがすすめられるようになった¹²³。

神戸市交通局も、所有していた摩耶山の広大な土地をはじめとする開発計画および、六甲山と摩耶山をつなぐ道路計画に着手するわけだが、戦後間もないこの時代に、観光道路に市費を回す余裕などなかった。そこで公共事業として認証してもらおうべく、「昭和 13 年災害復興費とか、砂防堰堤のための補償工事費とか、戦前のほとんど死文化しているようなものまで引っ張りだして、無理難題とも覚しきところまで強引に陳情した¹²⁴」。それでも費用が足りないので、1952 年（昭和 27 年）に制定された新道路法と道路整備特別措置法によって有料道路方式を採択し、建設省へ認可を求めたが、難航した。当時の道路建設は主に県が施工主体で、建設省に認可されていたのは、日光と阿蘇だけであった。六甲山だけ市が施工主体であり、このころの「国の神戸市に対する認知度は現在と異なり非常に低く¹²⁵」、また財政面でもきわめて厳しい状況にあった。しかし、「特定の民間会社が、民間企業用資金枠から借り、それを市へ転貸する方式だけが唯一残された方法¹²⁶」であることがわかり、阪急からの融資を取り付け、神戸市有料道路建設が始まった。当時、六甲山上の大半は、阪神が独占していたので、阪急がこれに対してなんらかの対抗策を考えているのではないかと神戸市が見込んで、阪急に融資についての相談をもちかけたのである¹²⁷。

当時、阪急の会長であった小林一三は、今後の六甲山系の展開について、欧米のようにオーナードライバーの時代となり、家族を乗せて安全にドライブすることを考えると、神戸市の道路計画である勾配 8.3%は計画として窮屈ではないか、幅員は 10 メートル以上、勾配は 5、6%に抑えるべきと提言した¹²⁸。「採算というものは、(中略)もっと広く総合的、

¹²² 神生：不明：p.3

¹²³ 同上：p.3

¹²⁴ 同上：p.4

¹²⁵ 同上：p.4

¹²⁶ 同上：p.5

¹²⁷ 同上：p.5

¹²⁸ 同上：p.9

多角的にものを考えるべき」であり、山上の地価の上昇、ホテルその他施設が賑わうことを勘案し、それらの利益をプール計算してはどうか、神戸市が採算上厳しいのであれば、阪急に道路計画を譲らないかと提案した¹²⁹。しかし、公道であるため法律上、市しか有料道路にできないことを伝えると、小林は「笑いながら、『役人というものは、いつも次々と法律をつくりながら、自分で自分の首をしめていますね。皆、目前のことしかみえないようですね』と、戦前大臣だった頃の事を回想されたのか、しみじみ言われて、神戸市の懇請をこころよく了承¹³⁰」した。かくして、神戸市の有料道路計画が始まったのである。企業が、行政と一体となり、今後の展開を予測し、レクリエーションの場としての六甲山系を創り上げる重要な役割を担っていたことがわかる。企業と行政の協働を象徴する道路であることから、本章で取り上げるにふさわしい事例として本道路計画に着目した。

また、工事自体もたいへん険しい道のりであった。花崗岩でできたもろい地盤を開墾し、現在のようにコンサルタント業などがなかったため、市職員が測量や設計等すべて担当した。予算の都合から、「測量人夫が雇えないので若い職員が命綱をまいて岸壁に下り、対岸からの手旗信号などによって伐採や杭打をした¹³¹」という。開通日の決定には現場から大きな反発があったそうだが、神戸市が強行を決定した。それからというもの「現場業者はもとより、課全体がまるで憑きものがのりうつったように奮い立って」作業し、8月に入ってから、開通日数日前は徹夜で作業が進められた。かくして、有料道路は開通パレードが行われる2時間前に完成し、1956年（昭和31年）8月10日、有料道路表六甲ドライブウェイが開通したのである¹³²。これらの記述に、当時の六甲山観光における躍動を垣間見ることができる。

このように、市政だけではなく、企業との連携を図りながら、交通整備は進んできた。これらの道路計画は、グループがもたらした登山やゴルフなど新しい「山の遊び」の幅を広げうるものとして評価できるだろう。

次頁は、神生がまとめた表六甲ドライブウェイ開通時までの六甲山開発の略年表である。

¹²⁹ 神生：不明：p.7

¹³⁰ 同上：p.7

¹³¹ 同上：p.8

¹³² 同上：p.5

明治 28 年	英国人グループ、六甲山に別荘建設
明治 36 年	六甲ゴルフ場開設
明治 38 年 4 月 12 日	阪神電車：神戸（三宮）－大阪（出入橋）間営業開始
明治末頃	阪神「阪神クラブ」を作る
大正 9 年 7 月 16 日	阪急神戸線開通
大正 14 年 1 月 6 日	摩耶ケーブル開通
昭和 3 年	裏六甲ドライブウェイ完成
昭和 3 年 11 月 28 日	神戸有馬電鉄湊川－有馬温泉間開業
昭和 4 年	表六甲ドライブウェイ完成
昭和 4 年 7 月 10 日	六甲山ホテル営業を開始
昭和 6 年 11 月 6 日	六甲登山架空索道（六甲ロープウェイ）開通
昭和 7 年 3 月 10 日	六甲ケーブル開通
昭和 7 年秋	六甲山上回遊道路の完成
昭和 9 年	宝塚－六甲ドライブウェイ竣工
昭和 9 年 7 月 3 日	六甲山オリエンタルホテル開業
昭和 12 年	六甲山カンツリーハウス解説
昭和 13 年	水害により、表六甲ドライブウェイ大被害を受ける (復旧できぬまま第二次世界大戦に突入)
昭和 18 年	西六甲縦走ドライブウェイ（軍用道路）竣工
(終戦直前)	鉄材供出のため、六甲ロープウェイ撤去される
昭和 26 年夏	六甲山キャンプ村の開設
昭和 26 年 7 月	六甲山ホテル営業再開
昭和 27 年 4 月 26 日	阪国バス六甲山上線（ケーブル山上駅・遊園地間）営業再開
昭和 27 年 6 月 29 日	神戸市バス、有馬街道経由で六甲山上に乗り入れる
昭和 27 年 7 月 1 日	六甲ゴルフ場再開
昭和 30 年 7 月 12 日	奥摩耶ロープウェイ営業運転開始
昭和 31 年 5 月 1 日	六甲山、瀬戸内国立公園に編入される
昭和 31 年 8 月 10 日	表六甲ドライブウェイ開通

ではなく、現在に連なる神戸の歴史と文化を支える基盤であったと評価している¹³³。主に外国人による六甲山の利用価値の創造、それを受け継ぐかたちで行われた市政・企業の手組みを見てきた。次章では、主に再度山（ふたたびさん）を中心とした六甲山系の植林事業について触れていく。

¹³³ 「神戸市森林計画」 1996 神戸市土木局公園緑地課 p.5-6

7. 六甲山系開発の歴史、本多静六

7-1. 本多静六による植林事業

再度山に深く関わった本多静六は、日本で最初の林学博士となり、「日本造園の父」と呼ばれるなど、近代都市公園の設計者として日比谷公園や明治神宮の森の造園に携わったことで知られている¹³⁴。とくに日比谷公園の設計は、設計案の決定に至るまで8年の歳月を要している。その背景には、日露戦争などの影響もあったが、当時目指した近代的な公園の具体的イメージをだれもつかめなかったことも大きな要因として挙げられている¹³⁵。本多の日比谷公園設計の意義は、西欧風の近代的公園の具体像を提示したことにあつた。また国立公園の必要性を主張した本多は、その意義を「風景の一般市民への解放」にあるとした¹³⁶。

神戸市が出版している「六甲山緑化 100 周年記念 六甲山の 100 年 そしてこれからの 100 年 (2003)」には再度山の当時の状況について以下のような記述がある。

その後 1899 年 (明治 32 年) 植林に先立って布引貯水池の水源域を視察した本多静六は、いわゆる赤松亡国論 (「我国地力ノ衰弱ト赤松」) のなかで、森林は乱伐による地力の衰えと共に第 1 期、第 2 期と悪化してゆくとして、『荒れ果てて丸裸になったあの瀬戸内地方の山々、殊に、早くから開けた地で濫伐暴伐も早くから行われてきた神戸岡山付近の諸山の現在は、もはや第 2 期の変化も終わって第 3 期の惨状を示すものが多い。あの再度山の松は百数年にもなるのに、人の背、腕の太さほどにもならず、地面はほとんど露出して水源全く涸れ、降雨のたびに土砂を流し、(中略) 川床ますます高くなり洪水 (中略) の害は

¹³⁴ 遠山益氏講演会「六甲山緑化の恩人、曾祖父本多静六を語る」神戸市立森林植物園にて (2010.06.04)

¹³⁵ 熊谷洋一、下村彰男ほか 1995 「マルチオピニオンリーダー 本多静六 日比谷公園の設計から風景の解放へ」『ランドスケープ研究』58(4) p.349-3

¹³⁶ 同上 p.350

年々ひどくなるばかり』と述べている¹³⁷。

また 1902 年（明治 35 年）本多の植林に先立つ現地調査に同行したドイツ人の招聘教師ヘフェレは「水道の水源としてこれほど荒廃した場所は世界にも類がない。博覧会にでも出典してはどうか」と皮肉ったと伝えられており¹³⁸、神戸又新日報は以下のように記している。

（前略）山の状況真に寒心すべきものあり。再度山の後方一体の連山は全面赤砂にして、一草一木の見るべきものなく、岩石骨を露にして諸処に黒点を点綴するあるのみ、宛然一小沙漠なりき。沙漠は外国にありと聞けるに神戸市の直ぐ後方の之を見んとは思ひも余らざりしなり。（中略）永遠の長計なき市民と当局者が、自らその山を赭にせるなり。濫伐の幣恐るべきかな（後略）

このように当時の再度山は、現在の姿からは想像もつかないほどに荒廃していたことがわかる。本多はこのような状況に危機感を抱き、「山」としての役割の必要性を述べている。そのことは阪神大水害の被災地へ視察に行ったときの神戸の街の様子を「治水の根本策と神戸市背山に就て（講演会議事録）」のなかで約 9 ページにわたり記しており、その主な原因について、六甲山系が花崗岩で形成されていることに加えて、六甲山付近および再度山周辺にはドライブウェイが通り、落葉や雑草は刈り取られ林内に遊覧人や茸取りが自由に踏み入れられたこと、そして江戸時代から続く濫伐にあると結論付けている¹³⁹。この水害に対して、六甲山系を別荘地にしたり、ケーブルをつくったりしたことを批判し、これらを一切やめさせることが安全な治山治水策だとする声もあるが、本多は講演会のなかで「それは文化の後退であって、今日の世に言うべき語ではありません¹⁴⁰」と語っており、観光地としての整備に反対はしておらず、「文化の後退」という言葉を用いて「山」としての景観、役割を確保すると同時に開発整備の推奨をしているともとれる発言をしている。この背景には都会に近い山である六甲山系が、今までの「里山」とは違った形で存在しうこ

¹³⁷ 神戸市：2003：p.14

¹³⁸ 同上：p.14

¹³⁹ 本多：1939：p.24

¹⁴⁰ 神戸市：2003：p.19

とを予測したうえで、どのような植物を植えるべきかを本多が考えていたと推測できる。議事録には治山についても詳述しており、どの種類の木々をどういった場所に植え、どういふ手入れをしていけばよいかも¹⁴¹記されている。これは、パイオニアツリーと呼ばれるマツやヤシャブシなどを多く植えることで、まずは剥がれ落ちた地盤を補修すること、針葉樹と広葉樹の混合林を目指したことがわかる内容となっている¹⁴²。

本多はグループのように直接神戸の人々に深く関わってきた様子はなく、治山という目的を達成するために再度山に関わっている。再度山の植林は、1897年（明治30年）に森林法や砂防法など国内の法整備がなされたことを皮切りに第日本山林会大会の林業視察、本多静六の講演会を経て1900年（明治33年）生田川上流の砂防工事施工を兵庫県に申請し、1902年（明治35年）再度山修法ヶ原にて試験植栽から始まっている¹⁴³。「この植樹実験では（中略）クロマツとヤシャブシとそれぞれ10,000本植樹し、良好な結果を得た¹⁴⁴」とされている。以下の写真は植樹が始まったころの再度山の様子である。



神戸市立森林植物園の展示パネルより筆者撮影（2010.06.08）

また1903年（明治36年）以降の職種選定やそう林案の策定を本多静六に委嘱し、本多

¹⁴¹ 本多：1939：p.24-27

¹⁴² 同上：1939：p.26

¹⁴³ 再度山歴史年表 神戸市立森林植物園にて撮影（2010.08.08）

¹⁴⁴ 神戸市：2003：p.16

の推薦で齊藤勝蔵を嘱託技師として案が調製された¹⁴⁵。また本多は阪神淡路大水害の視察に訪れた 1938 年（昭和 13 年）に開かれた講演会で興味深い発言をしている。

明治 35 年頃の布引水源地等は山の背が馬の背より狭く峠の両側は赤禿の崩落急斜面で、下方の溪間は一体の石原と沙漠であり、再度神社の森の外はほとんど森林なるものなくわずかにところどころに貧弱な笠松が點生せる状態であった。布引の水源地において之は地獄谷だと絶叫し、せっかく造林しても再び濫伐せらるるのを予防するため、この実況を写真で残そうと写しておいた写真が今尚神戸市の何処かにあるはずであります。

上記の写真がこのときに本多の指示で写された写真とされている。以下の二つの写真も同様である。



施工 1 年後の再度山（2010.06.08）



施工 5 年後の再度山（2010.06.08）

この造林で特筆されるのはその植栽樹種の多さで 20 数種類の樹木が植栽された。これはクロマツなどの砂防樹を主体としながらも特用樹（木蠹を採取するハゼの木や樟脳を採取するクスノキなど）を混植することで森林経営の安定に留意したことや神戸の大都市としての発展を見越した風致施業への布石がなされたのではないかと推測されている¹⁴⁶。

¹⁴⁵ 神戸市：2003：p.16

¹⁴⁶ 同上：p.17

このような記述に示されるように、本多が森林をさまざまな視点からの「利用」を試みていることがわかる。それは「保全(conservation)」でもなく、グループが目指した「遊び場としての山」でもないものであり、以前の里山としての機能を十分に果たせなくなった再度山をはじめとする六甲山系と神戸という発展の真ただ中であつた都市の関係を築くための礎になるものであつた。神戸の水源の確保のための「森林」と防災の役割の「森林」をつくること、また前述した「それは文化の後退であつて、今日の世に言うべき語ではありません¹⁴⁷」という本人の言葉からもわかるように、六甲山系の開発を否定することなく今後の再度山、六甲山系の在り方を神戸の人々に委ねた点は、外国文化を取り入れ、新しい文化をつくる過程にあつた神戸にとって重要な選択肢でもあつたとともに「大都市の発展と近隣の自然環境の維持、景観の保護」という新しい価値観の創造に影響を与えているといえる。また本多は、神戸背山一帯は、その位置と景勝という点からみて市の森林公園として利用されるべき運命であるが、地質や地勢、傾斜などに応じて安全な方法を取るべきであつて、開発が問題だつたのではなく、造り方が間違つていたことが水害の原因でもある¹⁴⁸と指摘しており、企業の保養所やホテルの立地などに具体的直接的に言及はしていないものの、その土地の特性を理解した上での開発の在り方を問うている。発展していく街に合わせた新しい「造園」ならぬ「造山」の必要性と可能性を再度山に見出していったことが、国立公園の編入や植林活動への布石になつたと考えられる。

7-2. 本多が目指した自然

阪神大水害ののちの水害復興のため砂防と治山の国直轄事業が始まり、1939年(昭和14年)災害防備林造成事業(植林)が開始された¹⁴⁹。しかし、2年後の12月には第二次世界大戦がはじまり、武器の材料調達のためにケーブルの柱が撤去されるなど観光の灯が消えていっただけでなく¹⁵⁰、植樹され根付いてきた木々は第1次世界大戦時と同様に木材は燃料として伐採され、明治時代初期に入会権が撤廃されて以降ほぼ無法地帯であつた六甲山

¹⁴⁷ 神戸市：2003：p.19

¹⁴⁸ 同上：p.19

¹⁴⁹ 同上：p.49

¹⁵⁰ 同上：p.24

¹⁵¹はなかなか緑が戻らなかった。終戦の2年後には六甲山観光交通委員会が結成され、六甲山の観光事業へと再び動き出す。そして、六甲山牧場やスケート場の開設、ゴルフクラブの再開など今日のレジャー・憩いの場としての六甲山の姿に近づいてくるのである。また1956年（昭和31年）5月10日六甲山地区として瀬戸内国立公園の一部に編入されたことも、植林を成功させ、現在の姿に至るまでの重要な出来事であった¹⁵²。

六甲山系は、高度に観光地化された山であり、その施設の間には車道が整備され、もちろん山道を利用したハイキングコースもあるが、実際に六甲山に登るとハイキングよりも牧場やガーデンテラスなどの施設に訪れている人が多く見られる。六甲山頂行きのバスが阪急六甲から毎日運行されているし、斜面を登るケーブルカーも人気である。昨今の「山ガール」人気で若い人が山に登ることも増えている¹⁵³。神戸市民は六甲山系を、「山に入る」という行為が生活の営みに必要不可欠である地域とは異なる「利用」をしている。



六甲山山頂付近（2010.12.03：撮影：すべて筆者）

グループや本田の六甲山系における活動が、現在も植林だけでなく、さまざまなアクティビティとして残っている。神戸市を活動拠点としているNPO法人エコレンジャーは、2009年4月から2011年3月まで筆者も活動を共にした団体である。親子ふれあい環境教

¹⁵¹ 高橋氏聞き取り：2010年06月18日

¹⁵² 玉起：1997：p.147

¹⁵³ 高橋氏聞き取り：2010年10月06日

育という親子を対象にした神戸近辺での環境教育を行っている。このNPOに参加し、さまざまな親子と触れあうなかで、ただ純粹に「自然と触れ合う機会を」と願う親もいれば、親自身が楽しむために参加している場合もあり、どのような形であれ、六甲山系や神戸近郊の自然に関わる機会が提供できることに意味があるのではないかと考えるようになった。

神戸の市民団体は、人と自然の間に危機的状況が乗じているような地域で見られるような社会的な影響力をあまり持っていないといえる。それは神戸市民の六甲山系に対する現在の関係性の現れにもなっている。つまり、大きな問題の発生していないこの地域において、市民団体の多くは政治的な活動をほとんどしておらず、自主的に六甲山系への関与を試みている。またその自主性は、社会問題のうえに成り立っているのもではなく、経済的利益を得るための営みでもなく、神戸という街で営まれる「都市生活」のアイデンティティのひとつの形として育まれたものである。これは、グルームの「山を楽しむ」という外国人によって持ち込まれた山での遊び文化が定着した結果であると言えるし、造園学という視点から見出された「風景の解放」を实践した本多の影響といえる。また2人の活動は、「自然保護」すなわち「六甲山系の森を守る」という観点から見ると、六甲山系と神戸市民の間に「人との関わり」を創り出すことによって、もたらされたものであり、森の再生だけでは創りだせなかつたであろう「関係」が創造されている。経済的な利用価値ではなく、神戸市民にとって憩いの場である六甲山系だからこそ、「六甲山系を守る」活動が現在も存在していると考えられる。



自宅より筆者撮影 (2010.12.03)

8. 現在の六甲山系と神戸市民の関係

3章以降、「都市山」として定義された六甲山に、行政が期待する役割とそれらに関するいくつかの取り組み、六甲山における開発（第5章、第6章）および再度山の植林事業（第7章）を見てきた。4章では、「都市山」を構成する「環境機能」、「文化機能」と「生産機能」の3分類で、六甲山の特有のあり方を考察した。本章では、六甲山系という「場所性」に着目し、その「場所性」がどのようにして創られているのか、そして、その「場所性」がもたらす六甲山系と神戸市民との関係を検討したい。その場所性において、どのような六甲山観がつくられているのかを探るため、本節ではまず「場所」の定義付けを行う。そして「場所のアイデンティティ」という観点から、六甲山系固有の「場所性」について考察する。次節以降では、「景観」として六甲山を捉えている神戸市民の意識とも異なった視点で、登山者や六甲山系で働く人、居住者への聞き取りから、それぞれの六甲山観を明らかにし、どのような場所性を構成しているのかを考察し、六甲山系における場所性の全体像を捉えたい。そして最終節では、それまでに明らかにされた「場所性」の形成に欠かさない災害という経験が住民にどのような影響を与えているのかを明らかにし、その影響がもたらす、「共存」の意味について考察したい。

8-1. 六甲山の場所性について

六甲山観からもたらされる場所性は、六甲山系という唯一無二の場所において創造される。ゆえに、その唯一無二の六甲山系で育まれる場所性もまた、唯一無二のものであるといえる。世界中どこにおいても「同じ場所」というものは存在しないのだから、固有性を認めることは、一見簡単なことのようにも思える。しかし、まずここで明らかにしなければならないことは、六甲山系のなかの営みの多様性によって生まれる個人、ないし共通の六甲山観が六甲山系でしか育まれないのかどうかという点である。

西日本を中心に、明治期には荒廃した里山が多くあったことは広く知られているが、外国人による新しい文化の登場や、観光地化のなかでの植林事業は、現在の「都市山」としての六甲山系を創造するうえで、きわめて重要な歴史であった。しかし、長崎市も貿易都市であったことから、外国人による文化の輸入は少なからずあったはずである。そういっ

た意味では、六甲山系の固有性を積極的に認めるとするのは、なかなか難しい作業である。

六甲山系がもたらす住民にとっての共通認識が、特有のものであると認めることができるとするならば、阪神大震災という災害の歴史に見出すことができるだろう。震災の影響がどのような認識となっているのかの詳細は次節に譲るが、「いろんな歴史があって、地震もあって、それでも六甲山がいいねん¹⁵⁴」という言葉の背景には、六甲山系にかかわるといふひとつのアイデンティティが関係していると考えられる。個人的な経験からもたらされるアイデンティティとしても捉えられるが、その個人的経験のなかに他人との交流が含まれている。その交流のなかでもたらされる「みんなとかかわっている」という感覚が、共通認識としての六甲山系に反映されていると考えられる。また「神戸といえば、六甲山¹⁵⁵」という認識もまた、神戸という「場所のアイデンティティ」が個人のなかにも存在していることを表している。

場所のアイデンティティは、その地域における「場所」の特性が個人ないし、地域や集団において認識されるということである。アイデンティティという言葉自体は、日常生活においても使われることがあるが、その言葉の意味や解釈される範囲は広域である。笹口健は、「法律上や制度上か、あるいは、個人の意識上かの違いはあっても、結局はいずれかの国、社会、あるいは個別の組織ないし集団に帰属しているかという個々人の『帰属意識』がアイデンティティの重要な要素になってくる¹⁵⁶」と述べている。また帰属すべき手段が明らかになったからといって、その集団の持つ価値観に全面的に適応できるとは限らず、民主化が進むほど「その価値観すなわち思考・行動様式も多様化し、選択の余地が大きくなる¹⁵⁷」と続けている。選択の余地を広げることによって生まれくる、「自分がなにものであるのか」という問いかけは、所属する団体ではなく、個人の内面に向けられた問いへと変化していくと考えられる。「その結果、導き出される個人の価値観に忠実に行動すること、すなわち自己の価値観に同一化することが、個人のアイデンティティの確立なのである¹⁵⁸」。自己同一化の過程で行われる内面への問いかけは、多様な場面で常に問い直されて、深化・変化していく。またその行為の過程には、他者との違いや互いの特徴を認識することによってさらに問い直されることもある。笹口の捉えるアイデンティティとは、主

¹⁵⁴ 矢野氏聞き取り：2014年1月2日

¹⁵⁵ T氏聞き取り：2012年10月30日

¹⁵⁶ 笹口健 1997 『文化とはなにか 知性の文化の発見』 近代文芸社 p.96

¹⁵⁷ 同上：p.97

¹⁵⁸ 同上：p.97

に個人レベルで問い直されるアイデンティティのあり方といえる。一方レルフは、アイデンティティは個々の人間や物体と、それが所属する文化の両方から基礎づけられると理解し、また静的で不変ではなく、状況や心情の変化とともに変化する動的なものであるとし、複数の要素と形態を持つと主張している¹⁵⁹。レルフは、アイデンティティを個人の内なる問いかけとは別の角度から解釈している。そして「場所」は、物理的で視覚的な形態、つまり「景観」を持つということであり、見かけの形は、たしかに場所のもっとも明確な特徴のひとつであると述べる¹⁶⁰。同時に、場所は、自らの直接経験による意味づけによると述べている。つまり、場所の構成要素は、静的な物質的要素（景観）と人間の活動と経験の意味づけにあるということである。レルフは、静的な物質的要素と景観を同義にしているが、本研究において、「景観」は静的な物質的要素だけではない、広がりをもったものとして捉えている。よって、ここでは場所の構成要素は、静的な物質的要素、人間の活動、意味の3つであるという見解に立って、「場所」の定義としたい。同時にこの3つが場所のアイデンティティを構成する重要な要素であるとレルフは主張するのである¹⁶¹。つまり、場所のアイデンティティは、その場所にかかわる人々の経験や歴史的な文脈によって構成される。アイデンティティが動的なものであるとするならば、それを支える場所性もまた動的な要素を含んでいると考えられる。またレルフは3つの構成要素が「ある場所において関連付けられ、その融合がその場所のアイデンティティを構成¹⁶²」し、これが基本的な関連構造であると主張する。

本章で、取り上げようとする周辺住民のアイデンティティは、笹口の主張する内なる問いかけから生まれるよりも、場所のアイデンティティに関係している。レルフの主張に基づくと、景観や地理的な位置の認識だけでなく、経験的・歴史的・概念的な側面から「場所」を捉えることができ、場所のアイデンティティをより具体的に明らかにすると考える。六甲山系の持つ、場所のアイデンティティが、どのような場所性となって表出しているのかを検証したい。

本章に至るまでに、六甲山の歴史を踏まえながら、かかわった人々の目指した六甲山の姿を明らかにすることを試みてきた。それぞれが目指した六甲山の姿こそが当時の六甲山の「場所性」を表していると考えられる。現在もまた、多様なかかわりのなかで「六甲山

¹⁵⁹ エドワード・レルフ 『場所の現象学—没場所性を超えて—』 1999 筑摩書房 p.85

¹⁶⁰ 同上：p.120

¹⁶¹ 同上：p.124

¹⁶² 同上：p.126-127

の場所性」は形成されているのである。六甲山の場所性の上に、それぞれの属性に付した六甲山観が立ち現れることになる。

続いて、六甲山系の場所性とは、どのように構築され、六甲山観の形成へとつながっているのか、探っていく。六甲山系の場所性の構築の過程として、都市山概念から導いた日常と異日常の往来によって生まれる営みの多様性が挙げられる。この営みの多様性を提供する場としての特性が六甲山系には存在している。では、この営みの多様性とはどのようなものがあるのか再検討していく。まず「働く」場における営みが挙げられる。次に「遊び」からもたらされる営みである。しかし、このふたつから六甲山の場所性を捉えられるわけではない。六甲山には現在約 250 人の居住者がおり、「住む」という営みの場にもなっている。六甲山系における場所性の考察においては、この 3 つの「場所」からの営みを分析し、六甲山系の持つ場所性の全体像を捉えたい。

8-2. 働く場としての六甲山

六甲山で働く人といってもさまざまな人々がいる。ここでは、働く人と六甲山系との関係を明らかにするため、神戸市民以外の人から見た六甲山系と幼いころから六甲山系の近くで生活してきた人のふたつの属性から六甲山観を探る。

仕事を通じて初めて六甲山と接触した自然学校ホールアースの大武氏は、ホールアースの本校がある富士山から転勤となり、現在ホールアース六甲山校に勤務している。六甲山校での職務に加え、他のスタッフとローテーションで、六甲ケーブルカー山頂駅の一角に設置された店舗を兼ねた案内所での物販および六甲山の総合案内を務めている。訪れる人から投げかけられる質問は、六甲山の植生や天気、各施設の案内にまつわるだけでなく、近くのトンネルの工事の進捗や昔六甲山山頂に設置されていた観覧車のことなど、多岐に渡る。案内所のなかには、各施設で催されるイベントの案内、時期別に分けられた植生や野鳥の資料などが並べられている。

六甲山は春先から、来訪者が増え、新緑が燃える 5 月に最初のピークを迎える。6 月は梅雨のためいったん落ち込むが、7 月からまた来訪者が増えていく。普通であれば、登山シーズンが過ぎる 10 月あたりから客足が減ってくるのだが、減らないのが六甲山の特徴のひとつに挙げられる。10 月以降にも季節に応じたさまざまな催し物がある。代表的なものを挙げると、神戸市が毎年 11 月に 2 回開催する六甲全山縦走大会がある。申し込みに徹夜で人

がいるほどの人気イベントで、須磨から宝塚までの総距離約 56 キロを平均 13 時間で走破するなかなか過酷なイベントだ。またノルディックスキーの講座や神戸市立森林植物園で開催されるクリスマスリース作りの講座など、1 年中多彩なイベントが催されている。近年では、若者を山に呼び込もうと、六甲山全体を展示場にした六甲ミーツアートが開催されている。若手芸術家を中心に展示を行い、六甲山のあちこちに展示された作品を一般客が見て歩くイベントである。開催期間中に六甲山を訪れるとそれらしき若者を目にする機会が多い。大武氏によると、悪天候が続いた 2012 年に比べ、2013 年は天候に恵まれ来訪者が多かったという¹⁶³。

六甲山は、珍しい植生や野生動物など貴重価値の高い自然がセールスポイントになっているわけではない。けれども、多くの神戸市民や近隣都市の住民が六甲山に足を運ぶことを大武氏は「不思議」に思っている。ホールアース本校には、日本一高い山であり、世界遺産にも登録された富士山を目当てに訪れる人が多いなか、六甲山には「天気がいいから」というだけの理由で登ってくる人が多く存在する。特に目的もなく、ただなんとなく登ってくる人の多さに「不思議さ」を感じている。日常生活のなかに六甲山が溶け込んでいることは、市街地でも見受けられる。神戸では、ほぼ例外なく、北には必ず六甲山系があり、南には必ず海があるため、北側を「山側」、南側を「浜側」や「海側」と表現される。以下の写真は、大丸神戸店の店内標識を撮影したもので、神戸の特徴のひとつである。六甲山系は、日常的に会話や標識のなかに溶け込み、明確な目的がなくても訪れる目的地となり、富士山とは違った魅力を持った山なのである。六甲山系の「自然」の魅力とは、自然的環境のみによって見出されたものだけではなく、それを日常生活のなかで無意識的に認知している神戸市民と六甲山の関係に向けられたものである。

つまり、大武氏が感じる不思議さと魅力とは、街の娯楽と対等に六甲山での「遊び」が選択肢となっていることにあるといえる。「山でのさまざまな遊び」が選択肢として含まれていることは、本多やグループが目指した「オープンで文化的な山」の結果といえる。六甲山という自然的環境が生み出す「遊び」の展開は、街の「遊び」とは異質なものであり、身近な「異日常性」が土台となっている。六甲山を職場とする人々は、多くのイベントを開催し、そこで行われるさまざまな営みの形成のきっかけを作り出す。「人を山に呼び戻すことで、山の活気を取り戻したい¹⁶⁴」という想いの先には、神戸市民と六甲山との関係と

¹⁶³ 大武氏聞き取り：2012 年 10 月 25 日

¹⁶⁴ 大武氏聞き取り：2012 年 10 月 25 日

いう六甲山独自の魅力の発見が積み重なってきた「働く場」としての六甲山観が形成されている。



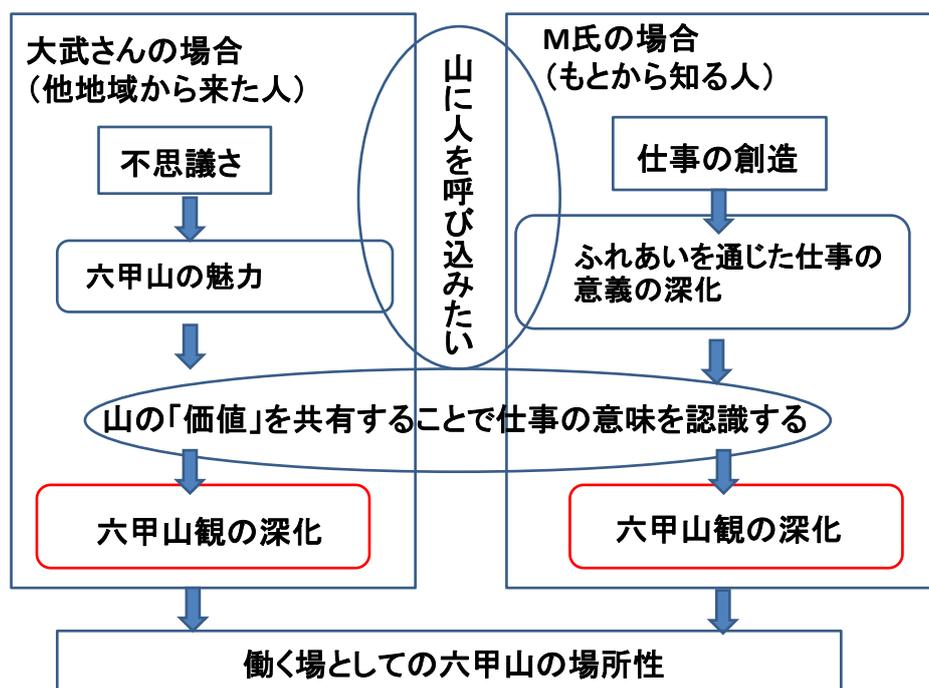
(2012年11月12日 大丸神戸店4階にて筆者撮影)

兵庫県立自然保護センターで働く M 氏（60代男性）は、須磨から電車とバスを乗り継いで1時間半ほどかけて六甲山頂に向かっている。M氏は、幼いころから六甲山系近郊に住んでおり、昔から六甲山を知っている。M氏の働く自然保護センターは、ボランティアガイドも行っており、M氏は自然保護センターでの勤務する以前から10年ほどボランティアガイドとして関わっている。2年前から自然保護センターに勤務し、周辺の管理を行っている。六甲山に飛来する鳥の観察・記録に基づいた M 氏オリジナルの展示、センター前の花壇の整備などを自発的に「仕事」として取り組んでいる。自然保護センターにおける仕事は、敷地内の清掃や訪問者への案内が中心となっているが、花壇の植物にそれぞれの名前を記したプレートを作るなど、自ら仕事を作りだしながら、並行してボランティアガイドも行っている。仕事をしていくなかで、自然の変化や来訪者の言葉によって、「ガイドのネタ」を見つけることもある。またガイドを続けることによって、自然保護センターでの仕事を見つけることもある。センターやガイドにくる人との触れ合いのなかで仕事の幅が広がり、自発的に仕事を作り出すことで、来訪者が六甲山を知るきっかけを作るという循環が生まれる。その循環が、六甲山系で働く「やりがい」となっている。ガイドに参加する人が増えることを願う彼の想いは、好きだからという個人的な理由だけに動機を置くものではなく、「仕事」が意義深いものになる過程に、六甲山系を場とした人とのふれあいが含まれている。

六甲山を職場としている人々は、日常業務において発見される六甲山の自然的環境の変化に関心を持つ。それは景観として眺める六甲山系でなく、「働く場」の環境という、具体

的な場所性をもたらしている。その場所性は、自然的環境の変化の発見や認識の連続性の上に表示される。そのような環境で働くことの意義を、仕事において関わる人々との経験のなかで見出している。

彼らの日常的な業務は「六甲山に人を呼び込む」ためのプロモーション的役割を持っているが、仕事を通じて形成される「六甲山観」は、自分自身の経験や「六甲山への思い」のみによって作られていくのではない。それらは、自然的環境と共に変化する来訪者の行動や目線・発見に直接触れ合うこと、ないし発見に導くような交流のなかで、働くことの意義が深められ、かれらの六甲山独自の魅力の発見や働く場としての意義や価値といった「六甲山観」が構成されていく。自然的環境のみによる「自然観」ではなく、「働く場」としての「六甲山観」が、他者とのかかわりや、他者が六甲山とかかわりを持っていくなかで、形成されるのだ。その多様なかかわりが愛着や問題関心へと変化してゆくのである。



(図 2 : 働く場としての六甲山系 : 筆者作成)

8-3. 遊び場としての六甲山

六甲山系には、さまざまな遊びがある。日本で最初にできたゴルフ場を筆頭に、企業や神戸市が運営する施設やそれらに繋がる登山道、また飯盒炊爨ができる場所に加え、富士山の練習登山にも使用されるような険しい登山ルートもある。また、山頂付近や摩耶山から望む夜景は、日本三大夜景にも選定されるほど見応えのあるものである。本節では、主に登山をしている周辺住民にとって、視界に入る「景観」としての六甲山系が登山を通じて、どのように変化するかを分析したい。登山をしている人を選択した理由は、車で行ける施設や施設自体が目的になっている訪問者に比べて、六甲山系とのかかわりがより身体的であること、六甲山系という自然環境がもたらす変化に登山を通じて体感していると考えられるためである。また施設訪問者に比べて、「登山」の目的から派生する「楽しみ」に広がりがあると考えたためである。登山者の選定は、年代とグループも考慮した。若い世代の選定は、街の娯楽と山の遊びがどのような位置づけになっているのかを考察するのにふさわしいと考え、また50代女性たちの選定は、それぞれの生活環境の違いを超えたところで共有される山の遊びが、どのような六甲山観の形成に影響を与えているのかを明らかにできると考えた。

近年の登山ブームや山ガールブームを受け、六甲山系の来訪者は増加し、最近ようやく震災前の観光客数くらいにまで回復している¹⁶⁵。六甲ミーツアートに訪れる若者も多く見られる。富士山の登頂を目標にしている女子大学生のKさんとOさん¹⁶⁶は、「京阪神でそれなりの登山ができるところと言えば、六甲山(Oさん)」という理由で六甲山を選択し、「ノリで来週(六甲山に)登ろや(Kさん)」となった結果、その日登山に訪れていた。天候に恵まれれば、今週でも来週でもいつでも気軽に訪れることができる点が、身近な六甲山の利点である。彼女たちは、「それなりの登山」ができることを目的としており、京阪神圏においてはやはり登山道が充実した六甲山が選択されることに不思議はない。しかし、登山の練習が目的であっても、そこにはさまざまな発見や楽しみが見出される。落ち葉に穴を開けて、顔をつくり、それを木々にはりつけながら山頂を目指していたため、「登るだけやったら、もっとはよついてんけど」、目に入る自然物を手に取って、「しょーもないこと(Kさん)」をしながら、練習登山の楽しみに奥行きを与えている。車で1時間半かけて

¹⁶⁵ 大武氏聞き取り 2012年10月25日

¹⁶⁶ 兵庫県立自然保護センター敷地内にて聞き取り：2012年10月25日

訪れた彼女たちは、「次はちゃうルートでまた来たい」と思えるだけの楽しみを見つけている。

また、近所に住むノルディックスティックを持った4人組の女性（50代女性）¹⁶⁷の表題は「健康維持」のための登山である。しかし、その表題が達成されるべく登山をしているかというところでもない。彼女たちの楽しみは、仲間とともに登山を楽しみ、山からの景色、山の景色を見ながらのデザートでもある。このデザートの楽しみは、「お友達と外で運動したあとに食べるのと、家でだらだらしとーときに食べるのでは全然違う（Cさん）」ものである。六甲山に登り始めたきっかけは、とくにないと答えたが、「車で登るより季節感じてええ（Aさん）」ことや、「歩いて登るとたいへんやねん、足痛いなったりするしな、でもそれが悔しいし、楽しい（Bさん）」ということが、六甲山登山を継続する理由になっている。Dさんは、以前六甲山で行われたノルディックカントリーのイベントに参加してから好きになったと答えた。このノルディックスティックを使った登山方法も、外国人が広めたもの¹⁶⁸で、現在もなお神戸市立森林植物園や六甲山大学のイベントで行われている。ここでもグループをはじめとする外国人が持ち込んだ新しい「山の遊び」が、一般市民にも根強く引き継がれている。

六甲山を訪れる彼女たちにとって重要なのは、家からの距離が比較的近く、気軽に登山ができることと、季節を感じながら体を動かすことである。日常生活のなかでは、味わうことができない「わざわざ訪れる身近な場所」なのである。しかし、彼女たちにとって「山であればなんでもいいわけやない（Cさん）」。やはり「旦那と登るより楽しい（Bさん）」と思える友人とともに、結局デザートを食べてしまい、健康維持としては「意味ない（Aさん）」登山となっても、車で登るより季節を感じられる六甲山に登るのである。スポーツジムに通っていながら、「六甲山登るほうが、楽しい」のである。そこには、友人と登山のしんどさを共有し、山頂でのデザートも共有し、また景色も共有してすることで、六甲山の楽しみに奥行きがもたらされる。近くにあるということが重要な要素になっており、またそれが日常生活との比較の場面で六甲山系の身近さと異日常性が映し出されている。

一方で、幼少時から六甲山系を遊び場とし、なおも登山を続ける人たちもいる。NPO法人エコレンジャーの元理事の朝戸照吉氏とそのご友人Tさん、Nさんに3人に、お会いする機会に恵まれ、お話をお伺いすることができた。Tさんは、神戸市須磨区出身で、六甲山

¹⁶⁷ 兵庫県立自然保護センター敷地内で聞き取り：2012年10月25日

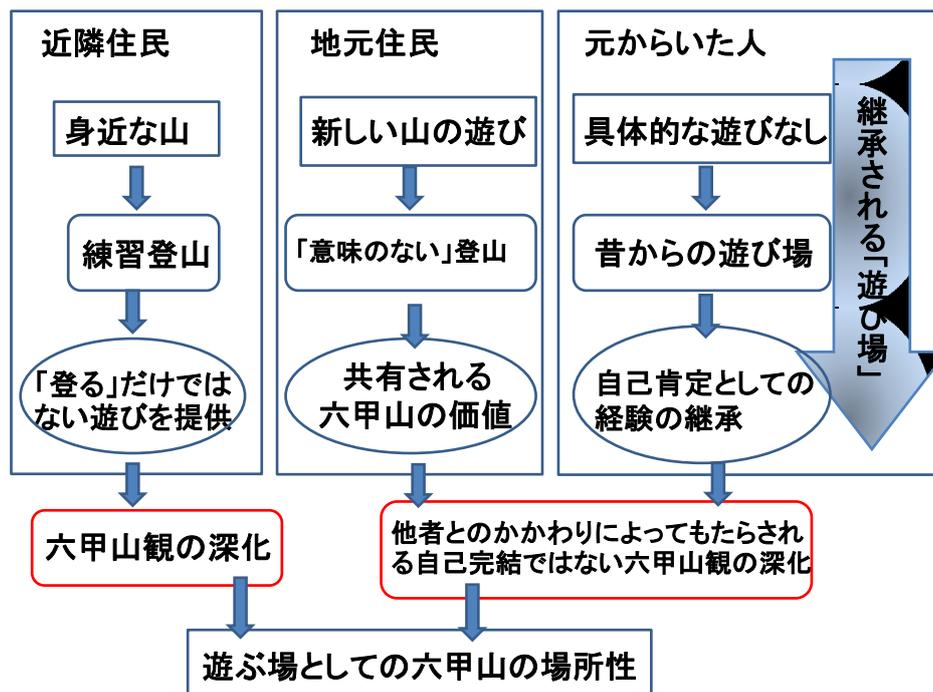
¹⁶⁸ 矢野氏の聞き取り：2012年11月17日

系の西部にある鉢伏山と海の間で生まれ育った。この地域は、海と山の始まりが、国道 2 号線と JR 東海道線の線路分しか離れていない珍しい地域である。よく水着のまま海へ行き、泳いでは濡れたまま家に帰ったという T さんは、須磨アルプスにもよく登っていたそう。彼は登山を特別な「山の遊び」として捉えているわけではなく、幼少時からの「遊び場」のまま六甲山系を捉えている。具体的に「何をして遊んだ」かという記憶はほとんどなく、「ぶらぶらしとっただけ (T さん)」である。N さんは、広島出身で高校生のときに神戸に引っ越してきたが、T さんと同じようによく山に遊びに行っていたが、「ぶらぶらしするだけ」なのである。彼らにとっては、グループが残した新しい「山の遊び」としての要素はほとんどなく、昔からの「遊び場」としての山として六甲山系を認識している。しかし、幼少期とまったく変わらないままであるわけではなく、まず山に登る際の装備は幼少期に比べて充実している。N さんが初めて須磨アルプスに登ったときは、ゴルフシューズだったが、あまりの険しさに足を痛めたため、トレッキングシューズを購入した。「買うともったいないからまた登る¹⁶⁹」わけだが、「もったいない」気持ちだけが再び山に向かわせるわけではない。再び山に向かわせるのは、「やっぱおもしろい¹⁷⁰」からである。そのおもしろさは、朝戸氏のように植生に詳しい人と登りながら、木々の特性や名前について教えてもらいながら登ることや、砂利道で植生のない富士山との違い、植生や動物の多様性に関心を持つことで、得られるおもしろさなのである。自然的環境によって得られるものだけではない。家族との飯盒炊爨において『お父さんってこういうことができるんやなあ』って子供が言うてくれる」ことで、家で見るとは異なった像を見せることにもなっている。また彼らが登山の途中で出会った子供を背負って歩いていた親子との会話から、親がしてくれたことを子供に返していく様子を見て、親として見せてきた姿が次世代に継承されていることに驚きと共感、そしてある意味での安心感を示している。これは、子供との接点として六甲山系での活動が思い出として共有されることで、自らの山とのかかわりのあり方が、子育てをしていく過程において、引き継がれていることと他者もまた同様のかかわりを持っていることを知ることで、自らの行動や関心が肯定されることの確認となっている。それらが、山に登ることで発見される今でも山に登るひとつの動機になっている。ほかの登山客との会話を通じて、親から子へ、引き継がれていく様子を目の当たりにしたことによって、他者にとっても六甲山という場が、子育ての場となっていることを確認し

¹⁶⁹ N 氏聞き取り：2012 年 10 月 30 日

¹⁷⁰ 同上

ている。また「やっぱりそうなんや」という会話における確認作業のなかで、六甲山の位置づけが深められている。「神戸の人はみんな、六甲山好きやねん」という言葉に現れるのは、個人のなかに形成される六甲山観から広がる神戸市民としてのアイデンティティなのである。神戸に住むということの愛着の出所のひとつに六甲山がある。



(図 3：遊ぶ場としての六甲山系：筆者作成)

8-4. 住む場としての六甲山

六甲山には約 250 人の居住者がいる。全盛期と言われる時代には 500 人から 600 人程度が居住していたとされており、その頃に比べると人口の減少が著しいことがわかる。阪神淡路大震災以降に減少したのではなく、高度経済成長期を超えたあたりから人口の減少が始まった¹⁷¹とされており、開発がひと段落したことが大きな原因と考えられる。

山頂付近に店舗を構える大正 10 年から続く登六庵は、現在のオーナーである矢野氏が先祖代々受け継いだ土地で経営している。ぜんそく気味だった父のために住んでいた大阪を離れ、六甲山に土地を購入したのちに始まったカフェである。グループが開発を始めた当

¹⁷¹ すべて矢野氏の聞き取りによる：2012 年 10 月 30 日

初から「特別階級の人しか買えない土地だった¹⁷²」が、長男が武田薬品株式会社の副社長であったこともあり、土地の購入が可能となった。秋の落ち葉掃除や冬のゆきかきなど、季節の変化が日常の行動に直結している彼は、「自然のなかで生きているという感覚」を持っている。その感覚が、六甲山のなかで生きているという自己認識へとつながっている。彼の店は、さまざまな国や地域に雑貨や美術書の買い付けに行った際に集められた、小さな切抜きが大量に貼り付けられ、オリジナルの壁紙を演出している。店内は、各コーナーでテーマが設けられており、和風、ヨーロッパ風、アメリカ風などというように集めてきたものたちの出身地によって居場所を与えている（下記写真）。



（登六庵店内の様子：2012年11月23日：筆者撮影）

この独特の壁面には「六甲山になにか残せたらな」という彼の想いが埋め込まれ、彼がここに存在しているということを示すひとつの手法なのである。それはつまり、六甲山に「生きた証」を刻んでいるということである。そして、六甲山に自分の証を残すということは、先人たちが残してきたものの大切さを後世にも知ってほしいという彼の想いに起因する。これはグルームの記念碑が、戦後立て直されたときに、業務的に行われたことへの

¹⁷² 矢野氏聞き取り：2012年10月30日

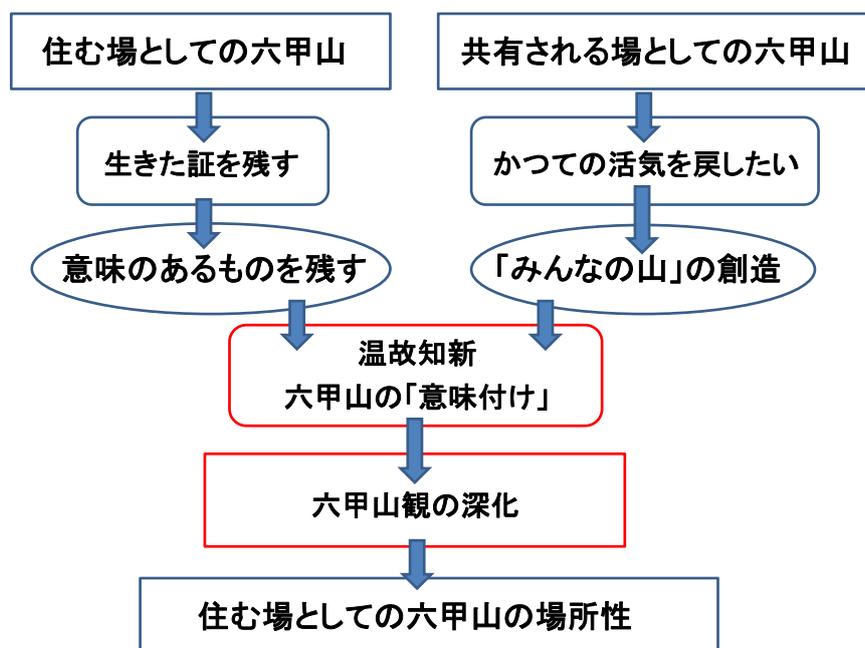
批判的なまなざしにもかかわっている。記念碑は、グループの功績に敬意を示したものであり、設置当時は、ゴルフ場がある東南を向いて設置されていた。ただ、記念碑を再設置するのではなく、その記念碑が持った意味も受け継いでいくことに重要性を見出している。そこに生きた人々の思いや意味を残すことが、先人から「受け継ぐ」ということなのだ。彼が店を続け、それが生きた証となって残されることは、彼が見てきた六甲山系の歴史を作ってきた人々の上に成り立つ自分の歴史を残すことであり、ただ単に仕事をするとは違った意味を持っている。六甲山で店を続けることが、六甲山で生きる意味なのである。資料や本には残されない歴史のなかに含まれた意味を無視することは、矢野氏自身の六甲山で生きることの意味づけが歪められることにもなり、企業や行政が比較的強くかかわる六甲山において、危惧される事柄なのである。この危機感は、開発が始まった当時は、企業や行政が主導で開発を進め、六甲山居住者の意志が反映されていなかったという彼の視点から生まれている。企業や行政による開発が進んだために当時の六甲山居住者の人口が多く、にぎわっていたことも事実である。一方で業務的な開発が、六甲山に存在する「意味」を意識的・無意識的に関わらず排除されたかたちで行われたこともグループの記念碑像の件からもうかがえる。

矢野氏は、現在六甲山系に若者が足を踏み入れることを歓迎している。とくに30代の人々の六甲山移住を願っている。それは人口が増えることでかつてのように医療所ができたり、ガソリンスタンドができるなど、六甲山での生活が便利になることを願っていることも含まれるが、業務的な開発によって「意味」を見落としのまま行われる開発を抑制することが可能となるような、居住者の増加を願っていると考えられる。それは、ただ企業や行政開発に全面的に反対・危惧しているのではなく、彼らが行った開発が今の六甲山を支えていることも理解し、その恩恵（施設来訪者が矢野氏の店に来店するなど）に感謝もしながら、歴史のなかにある「意味の継承」に重きを置いた「住む場所」としての六甲山の創造を期待しているのである。

矢野氏は大学卒業後3年間東京のテレビ制作の会社に勤務していたが、建物ばかりで、物があふれ、価値観が多様に見える一方で、はみ出すことへの恐怖のようなものを感じたが、六甲山に戻り、毎日違う表情を見せる自然的環境のなかで生活することにより、「自分が自分らしく、人と違ってええんやということ¹⁷³」を理解する。それぞれに個性があり、

173 矢野氏聞き取り : 2013年9月25日

それぞれに得意分野があることを重要視し、住む場としての六甲山を「みんなが住む山¹⁷⁴」としての場の創造が必要なのである。六甲山という山は、ただ訪れる場所でも下界なら眺めるだけの場所でもなく、ここで暮らす人々の生活の場なのである。



(図4：住む場としての六甲山系：筆者作成)

以上、六甲山を働く場とする人、遊ぶ場とする人、住む場とする人の六甲山の捉え方を見てきた。個々人のなかに、六甲山での多様な営みを通じて、それぞれの六甲山観が生成されている。それぞれが持つ六甲山観は、六甲山の場所性を熟成させる。その場所性は、六甲山特有のものであり、六甲山系に対する共通の認識へとつながっている。景観という日常的に目に見える出発点から始まり、異日常性と日常性を往来することで、六甲山系とのかかわりを持つ人々および生活の場とする生活者の言葉から、景観以上の役割をここに見出すことができた。それぞれがそれぞれの六甲山観を形成する素地は、里山であった六甲山系にあり、またそれをさまざまなかたちで造り変えていった人々の上であり、現在六甲山系にかかわる人々の経験によって作られている。

¹⁷⁴ 矢野氏聞き取り：2013年11月28日

8-5. 場所性がもたらす共通認識としての六甲山系

神戸市が行ったいくつかのアンケートから、六甲山系が「神戸らしいみどり」として認識され、また「誇るべき景観」として認識されていることについて触れた。また本章においてもそれぞれの六甲山観がもたらす場所性は、場所のアイデンティティという観点から、六甲山系特有のものであり、六甲山系に対する共通の認識につながっていると述べた。本節では、なぜその場所性が、六甲山系に対する共通の認識へとつながっているのかについて考察したい。

すでに、アイデンティティの議論において、笹口とレルフの議論を引用している。この共通認識においても彼らの視点は有用であると考え、引用したい。まず笹口がアイデンティティの定義において示した「帰属意識」という観点から六甲山系を考えてみる。六甲山系は、たしかに神戸を象徴する山脈であり、神戸市民の意識のなかに意識的・無意識的にかかわらず存在している。そういった点で、神戸という街に住む人々にとっては、帰属意識の所在として認めることができるだろう。しかし、レルフは、共通意識としてのアイデンティティをより詳細に論じている。

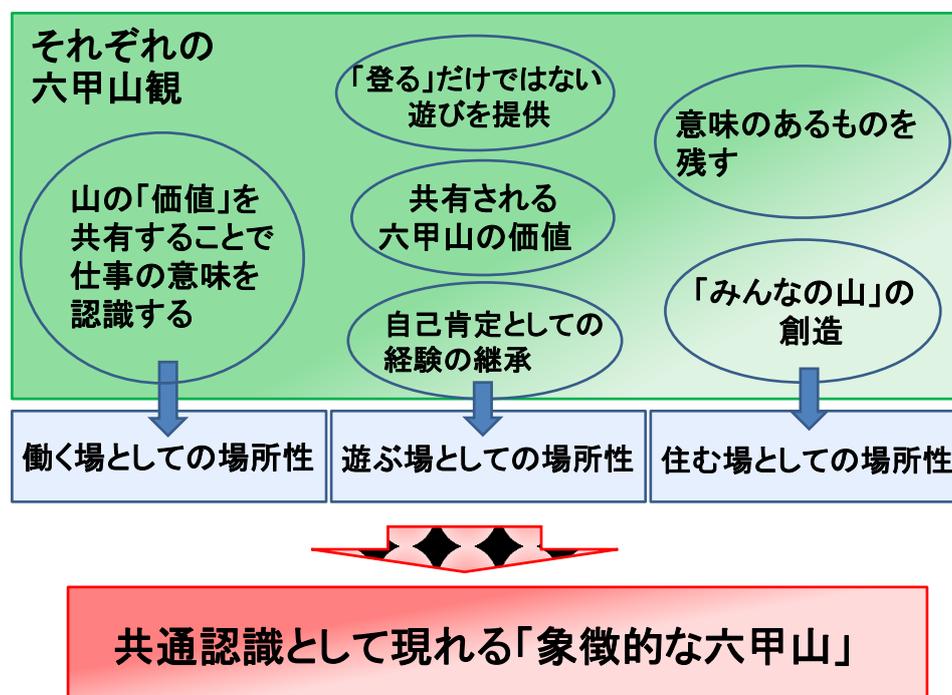
「集団や個人によって異なるアイデンティティがあっても、場所のアイデンティティに一致する基盤が¹⁷⁵」、場所にはあるという。共通するアイデンティティは、公共的アイデンティティと大衆的アイデンティティに分類することができ、前者は「確認しあえるような場所の要素の一致を含¹⁷⁶」み、後者は「世論を誘導する者によって与えられた、できあいのアイデンティティ¹⁷⁷」であると主張する。六甲山系の場合は、マスメディア等によって作られている「象徴としての山」ではなく、前者の公共的アイデンティティに属するといえる。この公共的アイデンティティは「表層的なレベルの関心からしかもたらされない社会において台頭している社会関係にすぎず、集団的イメージを束ねたもの」でしかないとも指摘する。しかし、六甲山系にかかわる人々にとっては、表層的なレベルの関心からしかもたらされていないわけではなく、具体的な営みによってもたらされる「神戸の象徴」としての六甲山系なのである。つまり、具体的な営みによってもたらされるそれぞれの六

¹⁷⁵ レルフ：1999：p.148

¹⁷⁶ 同上：p.148

¹⁷⁷ 同上：p.148

甲山観は、それぞれの「場所性」を構成するものとなり、またその場所性は、多様な営みを通じて、深化し、共通基盤としての六甲山系をかたちづくっているのである。



(図5：象徴的な場としての六甲山系：筆者作成)

8-6. 「共存」イメージ形成にかかわる阪神大震災

第8章に入り、これまでの分析から、神戸市民にとって六甲山系の姿とは、常にそこにあり続けながら、神戸市民に、さまざまな営みを提供し続けていることがわかる。その営みのなかに含まれる「遊び」の要素は、親和的な六甲山系との関係に基づくものである。しかし、六甲山系は歴史上多くの災害をもたらしてきた。とくに阪神3大水害（昭和13年「阪神大水害」、昭和36年、昭和42年）は、それぞれ被災家屋9万戸、7万戸、4万戸、死者は616人、26人、77人という大きな被害をもたらした¹⁷⁸。また1995年には阪神淡路大震災は6437人の死者を出し、避難生活者は30万人に上った¹⁷⁹。神戸港は大きな打撃を

¹⁷⁸ 神戸市ウェブサイト

http://www.city.kobe.lg.jp/life/town/river/suigaisonae/02kako_02.html (2014.01.17)

¹⁷⁹ 神戸新聞社 1995 『「阪神大震災」全記録』 神戸総合出版センター p.1

受け、世界第 3 位の貿易実績があった港もかつてのにぎわいは失われている。このように神戸市民は、常に六甲山系をはじめとする自然的環境と親和的であったわけではない。水害に被災した方には出会わなかったが、聞き取り調査を行った人のほとんどが阪神淡路大震災を経験している。この経験が、六甲山系と神戸市民の関係にどのような影響を及ぼし現在に至っているのか、分析を試みる。

阪神大震災から 19 年が過ぎたが、聞き取り調査を実施した対象者は、「自然」を語る時、必ず震災の話をする。そしてその影響は、語りのなかに如実に表れている。ただ穏やかにそこに存在している姿ではない、自然の圧倒的な力を目の当たりにした神戸市民にとって自然とは「共生」の対象ではなく、「共存」するものなのである。それは、真冬に吹きすさぶ六甲おろしの冷たさとは違う「自然の姿」として記憶されている。水害や震災を通じて、自然が管理不可能にあることを経験的に理解していることによって、「共生」よりも「共存」することが意識のなかに根付いている。彼らが持つ「共生」のイメージは、親和的で常に時の流れをともに経験する「恵み」の自然であり、それに対する人々のかかわりもおだやかであることが見受けられる。彼らが経験的に知る、親和的ではない自然の姿は、ときに人命を奪い、住処を根こそぎ破壊する力を持った「自然」であり、自然との「共生なんか、きれいごと¹⁸⁰」なのである。彼らの考える親和的ではない「自然」とは、丸山があきらかにした「さまざまなサル」が持つ、親和的ではない側面とは異質なものである。「さまざまなサル」がもつ親和的ではない側面は、「かわいいサル」や「地元のもん」という言葉に表れながら、多面的なサルの捉え方を可能にし、その多面的に捉えられたサルとともに作られてきた関係性がある。これは双方のかかわりのなかで構築された関係であるが、阪神淡路大震災とは、双方のかかわりとは別の次元で起きた自然現象であり、それが今まで身近に感じられていた六甲山系という「自然」を「共存」という「距離」へと引き離している。ここで一点注意したいのは、六甲山系は身近な「自然」でありながら、人と自然の関係を考える際には、地震という自然現象に包括された「自然」へと変化する事である。六甲山系とのかかわりを語る時、六甲山系は彼らの愛着の出所として、たしかに存在している。六甲山系における営みの多様性は、それぞれの六甲山観を形成し、六甲山系に場所性をもたらす。しかし、「人と自然の関係」という広い視点に立ったとき、それまで親和的に捉えられていた六甲山系さえも「脅威を与えうる自然」としてある意味で遠ざかっていくのである。この現象は、日常的に経験してきた身近な六甲山系が、その

¹⁸⁰ M 氏聞き取り：2012 年 10 月 25 日

理解を超えたことによって起きたものである。

だからといって、六甲山系や自然的環境を敵視したり、みどりへの想いさえも遠ざかっていくわけではない。神戸市が行った 1996 年の市民全世帯アンケートでは、約 92%に及ぶ神戸市民が神戸に住み続けたいと答えている。このアンケートの興味深い点は、震災の翌年に行われたアンケートという点である。震災後、神戸市外に転居した世帯へのアンケートでも 85%が神戸にもどりたいと答えている。また住み続けたい神戸のイメージに関する設問（複数回答）では、52.8%が水や緑などの自然にめぐまれた街と回答している。このように、震災という自然の脅威を目の当たりにしながら、「みどりの街、神戸」を維持したいという気持ちが表れている。林は、神戸市内の 3 つの小学校に通う児童の父母を対象に①震災後みどりに対する意識は変わったか（約 62%が「はい」と答えた）②震災後、街にもっとみどりを増やしたいか（約 80%が「はい」と答えた）③公園の構想がある場合、どのような公園が望ましいか④まちに公園を作るとすれば、そのくらいの大きさのものが欲しいか⑤身近な公園や緑地において整備してほしい施設の内容⑥景観やみどりに対する意見⑦公園で遊びたい内容の 7 つを設問し、みどりに関する意識調査¹⁸¹を行った。①においては、みどりに関する意識がどのように変化したかという問いに対し、「みどりが延焼を防ぐことを知った」「ブロック塀が倒れても生垣は倒れなかった」という回答が得られ、②によって震災後みどりの必要性が再認識されたと結論付けた¹⁸²。みどりの役割を知ることで、地震との関係性を見つめ直すきっかけとなっている。⑦では「震災後六甲山が崩れたのが痛々しい」「防災のための樹木を増やす」等の記述がみられたという¹⁸³。以上の意識調査から、神戸市民が震災を経て、六甲山系を含めたみどりの役割を特に防災面での充実を求めていることがわかる。震災翌年のアンケートであることも影響しているだろうが、一般市民の意識のなかにも震災の経験が刻まれ、「みどり」への意識が変化している。そして、六甲山系が地震によって崩れた様子に痛々しさを感じ、ともに「地震」に、傷つけられたかのような身近さを見出すことで、六甲山系を含む「みどりの役割」の充実を求め、意識の高まりがみられる結果になっている。

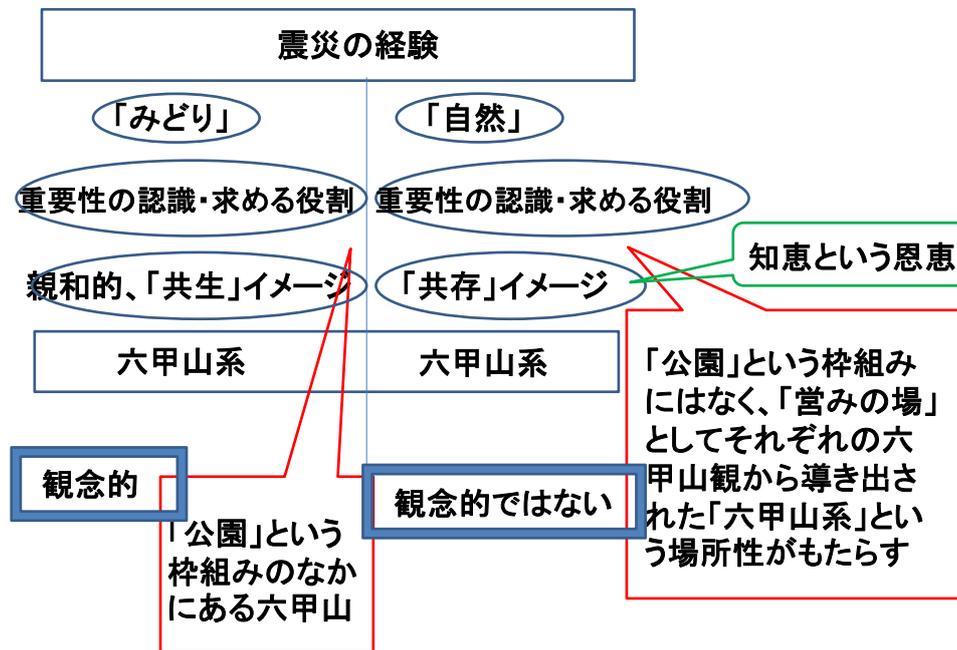
しかし、この意識調査にも見られる「みどりの意識」や「みどりの街、神戸」という表現に用いられる「みどり」と、「共存」する距離感を持った「自然」は、異なったニュア

¹⁸¹ 林まゆみ 1996 「阪神大震災後のまちづくり運動と住民の意識にみられるランドスケープの位置づけ」『ランドスケープ研究』60(1) p.62-63

¹⁸² 同上：p.62

¹⁸³ 同上：p.63

ンスを抱いている。前者の指す「みどり」とは親和的な自然の姿であり、「共生」の姿なのではないだろうか。常に穏やかに存在し、景観としての親しみを提供する場として「みどり」と表現されている。その「みどり」の構成要素の対象となっているのは、近所の公園の樹木や街路樹と、六甲山系である。近所の公園の樹木や街路樹、地崩れを起こした六甲山系の表層部分は、計画的な植林という人間のコントロールの下で、「みどり」としての役割と景観を、取り戻すことができる。この「みどり」とは、すなわち利用価値からもたらされる「共生」の姿である。ここで言われる「みどり」は、震災後の区画整理事業等の都市計画事業が策定された流れにおいて、狭義の「公園」という枠組みに、六甲山系を含めているために、具体性に欠ける「みどりとしての六甲山系」を創りだしてしまっている。公園や街路樹、六甲山系も含めた極めて広い意味でつかわれている「みどり」は、まさに観念的な「みどり」である。意識調査を実施した父母を対象に詳しい聞き取り調査を行えば、より具体的な経験からもたらされる「みどり」観が存在するかもしれない。しかし、この意識調査のなかでは、具体的な「みどり」観は明示されておらず、視覚的に認識できる「みどり」、つまりただ漠然と捉えられた「みどり」への意識の高まりを示すにとどまっている。六甲山系を「公園」という行政区分のなかで捉え、震災後の「みどり」への意識の高まりを明示しても、聞き取り調査で得られた具体的な「六甲山観」の形成には至らないことがわかる。なぜなら、親和的ではない地震という経験を経て、得られた「みどり」への意識向上のベクトルが親和的な「自然」に向いているため、地震という「自然現象」と六甲山系とのつながりが切断されて認識されているからである。神戸市民の持つ六甲山観というのは、身近な公園の先に六甲山系があり、六甲山系の先に地震をもたらすこともある「自然」があって作られているのである。六甲山系を行政区分における「公園」と捉えることの限界はすでに指摘した通りであるが、「共存」イメージの形成においても、その限界が示されたことになる。



(図 6: 「共存」イメージの分析: 筆者作成)

阪神 3 大水害では、昭和 13 年に起きた死者 616 名を出した阪神大水害に比べると、昭和 42 年の水害時のほうが、降水量は多かった。しかし、治山事業を筆頭に防災事業が進んだことが、被害を抑えたといわれている¹⁸⁴。昭和 42 年の水害において、植林事業を始めとした防災施策によって被害の拡大を防いだことは、六甲山系とのかかわり方を見直す大きな出来事であったと推測される。本多が、残した言葉の通り、六甲山系は、神戸背山として治山の役割を果たすべき姿として存在するべきだったのだろう。禿山になった六甲山系に植生を取り戻すことが、神戸市民にとって生活環境を守る重要な要素だったことは間違いない。しかし、やはりそれだけでは、六甲山系が「みどり」の役割のなかに収まってしまいうことになり、営みの多様性は今日に至るまで、続かなかったと考えられる。グループが残した新しい「山の遊び」と企業・行政の連携した六甲山系の観光地化をベースに、周辺住民が六甲山系とさまざまなかたちでかかわり続けてきたことが、「みどり」の枠組みには収まらない六甲山系を創り上げ、「共存」の対象として、営みの多様性を支えているの

¹⁸⁴ 神戸市ウェブサイト <http://www.city.kobe.lg.jp/safety/disaster/flood/flood02.html> (2014.01.24)

である。

一方、地震の発生は、防ぐ術がない。予期せぬタイミングで、どこで起きるかわからない。地震に対する防災は、地震が起きたときのための備えということになる。意識調査の回答のように、ブロック塀より生垣のほうが地震に強いということや井戸やため池などによる貯水の重要性も地震の経験からの学びであったといえるし、そのようなまちづくりも重要である。東日本大震災以後、緊急地震速報が採用され、地震の発生がよる素早く知ることができるようにあったが、やはり「地震の発生」自体については、防ぎようがないというのが現実的見解だろう。

聞き取りをした人々の意識のなかに、震災の経験が刻まれ、六甲山系を含む「自然」が「共存」の対象としての認識されたことは、災害を経験したことから引き出されている。「共生とか、自然保護なんておこがまわしいわ¹⁸⁵」という言葉には、今までの自然理解を超えた地震という圧倒的な自然の力を知ることを経て、「共存」することにたどり着いた六甲山観が存在している。「どうやっても勝てへん¹⁸⁶」自然（地震をもたらす自然的環境）とのかかわりは、「共存」という「距離感」をもたらす一方で、それは必ずしもネガティブな要素を持つものではない。六甲山系との関係において、親和的ではない要素が含まれることは災害を経験してきた周辺住民にとっては、ある意味で当然のことなのである。そのような破壊的な威力を持った自然災害を通じて獲得した「共存」イメージは、六甲山系との「距離感」ではなく、「自然との付き合い方を学ぶ知恵¹⁸⁷」として、六甲山系とのかかわり方を支えている。この考えが「共存」をネガティブな視点から生まれる「距離」ではなく、六甲山系の「身近さ」を保たせていると考えられる。

哲学者の氣多雅子は、「自然」は常に社会的に認知されたものであるとしたうえで、そもそも自然災害は「災禍の範型であり、（中略）それが悪しき出来事であるというのは（中略）あくまで人間にとってのことであり、『自然災害』という言い方のなかに人間と自然の関係が含まれている¹⁸⁸」と考えられる。自然災害とは、常に人間の多様な活動の外側に存在するのではなく、その理解さえも、人間の社会のなかに取り込まれている。しかし、我々の持っている自然理解を超えることが起こったということが、「実は自然災害という

¹⁸⁵ M氏聞き取り：2012年11月11日

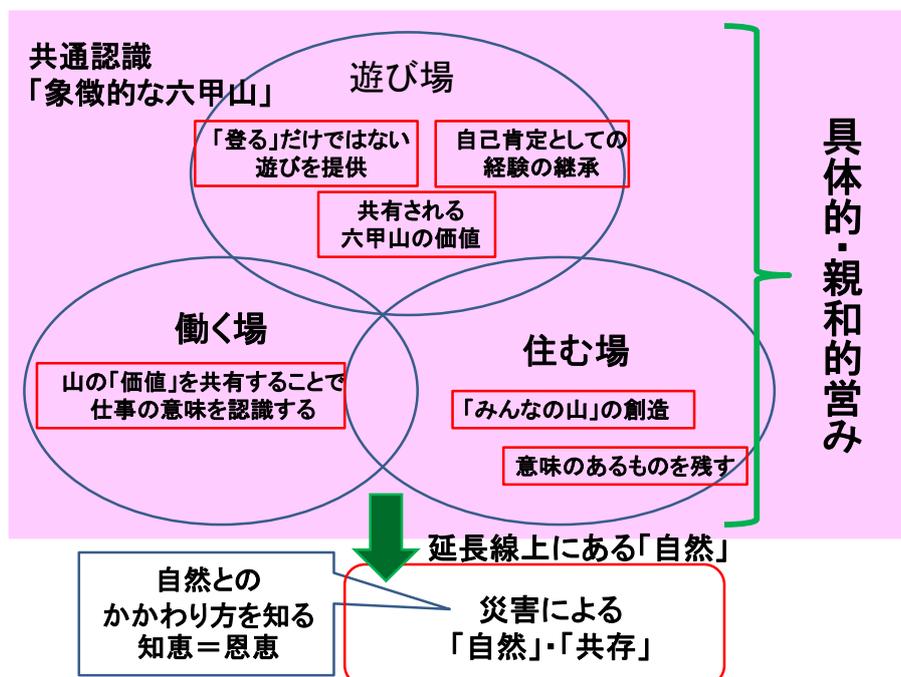
¹⁸⁶ 同上

¹⁸⁷ 朝戸氏聞き取り：2014年1月2日

¹⁸⁸ 氣多雅子 2012「自然災害と自然の社会化」『宗教研究』86（2）p.88

ことの意味¹⁸⁹」であり、その意味こそが、六甲山系を含めた自然的環境が管理不可能であることを知った「災害」という経験から与えられる「自然との付き合い方を学ぶ知恵¹⁹⁰」という「自然の恩恵」なのである。

「共存」のイメージは、阪神淡路大震災の経験が大きく影響していることが明らかになった。しかし、すべての人々が抱く六甲山観が、「共存」イメージを形成しているわけではない。日常の六甲山系での活動においてもたらされる六甲山観は、身体的なかかわりのなかで形成され、営みの多様性によって支えられている。また営みが行われるそれぞれの場所（働く場、遊ぶ場、住む場）は営みによって連結している場合がある。たとえば、遊ぶ場をフィールドにした人が、ケーブルカー山頂駅を訪れることで、働く場に身を置いた人との接点が生まれる。この接点を起点に、遊ぶ場をフィールドにした人は六甲山系の植生やレクリエーションに関心を持ち、新しい「山の遊び」に触れる機会も持つ。そうして経験された事柄によって、六甲山観が深化していく。また働く場に身を置く人は、そういった訪問者の反応やふれあいを通じて仕事の意味を確認し、六甲山観を深めていく。このようにさまざまな場における営みのやりとりがそれぞれの六甲山観を育てている。営みのやりとりのなかで育まれる六甲山観は、具体的でありながら、親和的なものである。



(図7：場の関係図：筆者作成)

¹⁸⁹ 氣多：2012：p.89

¹⁹⁰ 朝戸氏聞き取り：2014年1月2日

「共存」という言葉が、聞き取り対象者から意識的に発せられるとき、その「共存」の対象は、六甲山系だけを指しているわけではなく、「自然」が対象となっている。しかし、六甲山系とのかかわりの語りの延長線上に、「自然」と「共存」というキーワードが出てくるのである。具体的・親和的な六甲山系とのかかわりの延長線上に、自然現象も含めた「自然」のかたちをイメージしていると考えられる。六甲山系とかかわる住民にとって、六甲山系とは、「自然」なのである。それは矢野氏の「自然のなかで生きてるちゅう感覚はありますわな¹⁹¹」や T 氏の「六甲山の自然は、富士山とは全然違うねん¹⁹²」という言葉など随所に見られる意識の表れであった。そして、彼らの指す「自然」とは、日頃身体的にかかわりを持つ六甲山系だけではなく、災害という自然現象も含んだ「自然」なのである。

¹⁹¹ 矢野氏聞き取り：2012年11月17日

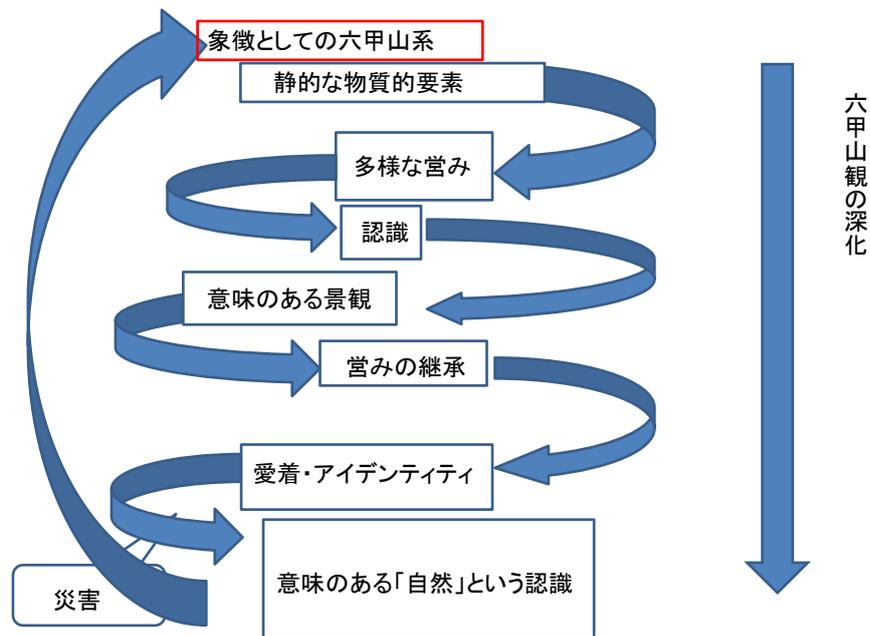
¹⁹² T氏聞き取り：2012年10月30日

9. 六甲山系の「営みの多様性」からみる自然観

六甲山系の歴史に始まり、その歴史の上に営まれるさまざまな営みを見てきた。その営みの舞台となる六甲山系の場所性から、場所のアイデンティティを論じ、またそれぞれが形成する六甲山観を明らかにしてきた。本章では、六甲山観の深化プロセスを明らかにすることで、六甲山系がもたらす「意味」についてより考察を深めたい。

9-1. 六甲山観の深化プロセスと「共存」イメージ

それぞれの六甲山観の深化のプロセスは以下のようにして、表すことができる。まず、「物質的要素」である六甲山系の存在から始まり、そこで周辺住民によって「さまざまな営み」が行われる。その営みは、地形から生まれる景観への親しみと日常⇄異日常の往来・「住む」場のなかに生まれ多様性を育む。六甲山系は、その営みの多様性が生まれる生活の場としての特有の場所性を有する。そして、それぞれの場所によって行われる多様な「営み」によって、六甲山系というものの存在を「認識」する。その「認識」が、「物質的要素」であった六甲山系を「意味のある景観」に変化させる。その「意味のある景観」は、六甲山への関心の源泉となり、再び営みの多様性を育む。「意味のある景観」のなかで行われるさまざまな営みが、子育てやイベントなどさまざまなかたちで「継承」されていく。その「継承」される様子が日常の会話や仕事を通じた人々との触れ合いのなかで実感される。もしくは、その「継承」の担い手となることで、六甲山系で生きる意味をもたらす。また触れ合いのなかで無意識的に「継承」の担い手になっていることや担い手が育っている実感を通じて、六甲山系に対する愛着が生まれていく。その愛着が、六甲山系に場所のアイデンティティを確立させ、また自らも帰属意識のなかに六甲山系を位置づけていく。そのようなプロセスを経て、六甲山系が「意味のある自然」として認識されていくのである。



(図 8 : 六甲山観の深化 : 筆者作成)

アイデンティティは日本語で自己同一性という訳すことが多い。自己同一性は、精神の成熟によってもたらされ、その熟成には3段階あるとされてきたが、アルネ・ネスは自己形成にかかわる関係は、他の人間や人間社会との関係に限られるものではなく、人間以外の存在との関係にも深くかかわっていると主張する¹⁹³。自己同一性とは、自分以外のものを自分と同等に捉える、もしくは「他者のなかに自分をみる」ということである。では、このアイデンティティという言葉を自己同一性として理解して、六甲山系と神戸市民の関係を見てみるとどうなるのだろうか。六甲山系は、象徴的景観として神戸市民の誇るべき景観であることは神戸市の実施したアンケートに示されている。聞き取り調査対象者の「神戸への愛着」の出所として六甲山系が含まれていることも明らかになった。しかし、それは、つまり六甲山系と自分自身を自己同一視しているということなのだろうか。おそらく、そうではない。確かに、神戸というまちとそれを代表する六甲山系に、帰属意識としてのアイデンティティや、場所のアイデンティティがもたらす愛着を周辺住民は持っているが、

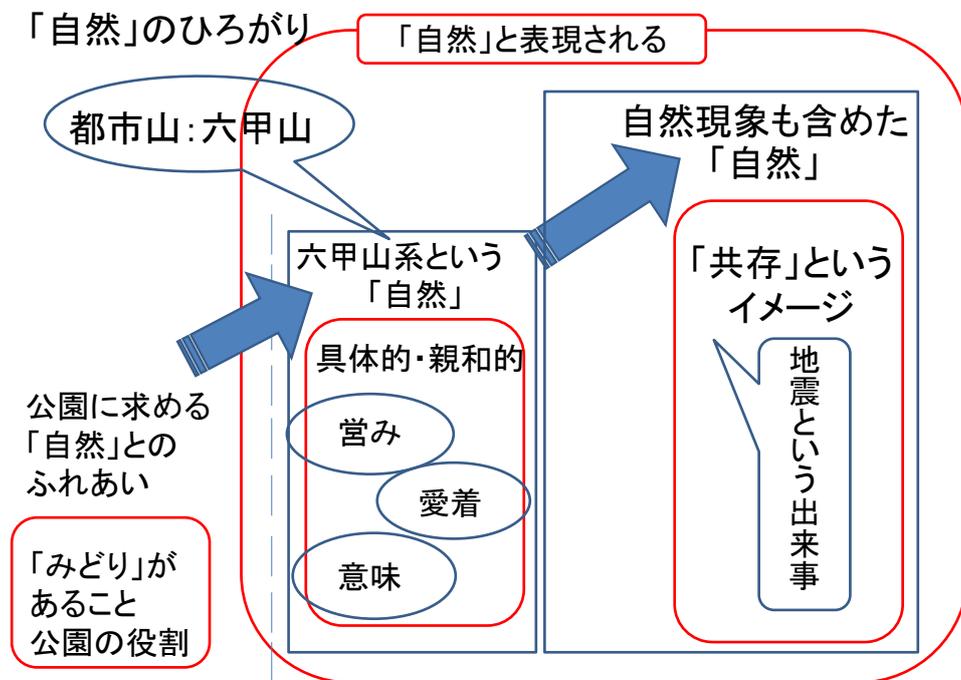
¹⁹³ アルネ・ネス 2001 「自己実現—この世界におけるエコロジカルな人間存在の在り方」、井上有一/アラン・ドレングソン (編) 『ディープ・エコロジー—生き方から考える環境の思想』 p.46-47

「共存」というイメージを抱く周辺住民の意識から、推察するに自己同一性にまで及んでいない。アイデンティティと自己同一性のあいだには、まだいくつかの段階が必要なのではないだろうか。その点において、アイデンティティと自己同一性のあいだには、議論の余地が残っている。笹口が示したようなアイデンティティ、すなわち内なる問いかけから形成される自己の確立という観点においては、ネスの主張に通じるものがある。哲学的思考探索において、自己を認識することで、自己の広がりや深さを増していくものである。しかし、レルフの論じた場所のアイデンティティは、六甲山系にオリジナリティを与え、そこでの営みにかかわる人々が持つ六甲山観の形成に影響していることを明らかにしたが、自己同一性というレベルには達していない。そういった点で、本事例におけるアイデンティティの捉え方としては、レルフの主張に依拠してアイデンティティの議論を展開した。本章で取り扱うアイデンティティもまた、同様に自己同一化とは異なったものとして理解し、周辺住民と六甲山系のかかわりにおけるアイデンティティの確立としたい。

続いて、「共存」という言葉を意識的に使用する背景に阪神大震災を据え、彼らの「自然」という言葉の分析を試みる。周辺住民は、災害の経験から、その「意味」を問い直し、「共存」の対象としての「自然：六甲山系」が生まれている。六甲山系における「共存」のイメージは、阪神大震災のみによって作られたわけではないだろう。神戸の市街地においても日常的に遭遇するイノシシは、「共存」のイメージを作る要因とも考えられる。しかし、聞き取り調査のなかで「自然」が語られるときに表出するのは、阪神大震災の経験なのである。イノシシは「共存」のイメージを作りうるが、阪神大震災のような人為を凌駕するような出来事は、決定的なインパクトを与え、意識の変化をもたらしている。その決定的なインパクトが、日常生活にまで変化を与え続けているのか、日常的な活動においてどれほど意識されているのかは、今回の聞き取り調査では明らかにすることができなかった。しかし、彼らの「自然観」のなかには、確実に阪神大震災の経験が根付いている。このことは、「共存」イメージの形成において着目すべき点である。下記は、聞き取り対象者および神戸市のアンケートから「自然」という言葉の広がりを図式化したものである。同じ「自然」という言葉に、さまざまな役割や意味が含まれていることがわかる。

下記の図式が示すものは、まず周辺住民の山の認識が、静的な物質的要素に基づいているということである。同じ「自然」でも「公園」に求めるものと、六甲山系に求めるものが明らかに異なっている。また六甲山系における親和的・具体的かかわりがもたらす「自然」認識は、ある種「共生的」なものがある。しかし彼らは「共存」という言葉を意識して

利用する。「共存」の対象となる「自然」と、六甲山系という「自然」はまったく異なった意味をもっているのだろうか。彼らが「共存」の対象としての「自然」を語るときは、六甲山系の「自然」の延長線上にあった。それは、単に「自然」という言葉を専門的な知見がないゆえに、ただ混同して使っているからだろうか。おそらくそうではない。その理由に、朝戸氏の「自然との付き合い方の知恵¹⁹⁴」という言葉が挙げられる。親和的ではない震災という出来事を「ネガティブ要素」として捉えるのではなく、「自然との付き合い方の知恵¹⁹⁵」という恩恵に変換して認識することで、六甲山系と自然現象を含めた「自然」との融合を図っていると考えられる。



(図9:「自然」の分析:筆者作成)

¹⁹⁴ 朝戸氏聞き取り : 2014年1月2日

¹⁹⁵ 同上

9-2. 都市における「自然」の意味

9-2-1. 場所のアイデンティティに依拠した営みの場の確保

先行研究において、都市公園における緑地保全の在り方が、具体的な自然観の形成においては、不十分であることを指摘した。レルフの示す「場所のアイデンティティ」が、六甲山系のさまざまな営みに深い意味づけをもたらしている。そして、それぞれの六甲山観に広がりをもたらし、愛着のある景観、意味のある自然の創造へと螺旋を描くようにかかわりを展開している。このような営みを支える場所の在り方は、法規制や一方的な管理の在り方では、維持しえないものである。六甲山系という巨大な山塊においては、景観保護や開発規制など政策的管理もその場所を維持するためには不可欠なものであるが、それらの規制が、営みの妨げになってはならない。そういった点から、都市における「自然」とは、「公園緑地」ではない「自然」に意味があるのである。もちろん、「公園緑地」には、それとしての機能は明らかに存在しており、防災や近所の「普通公園」として果たしうる役割はあるだろう。「公園」機能としての役割の在り方については、深く踏み込むことはできなかったが、六甲山系という自然的環境がもつ機能と意味については、「緑地公園」とは異なった角度から明らかにできたのではないだろうか。

「公園緑地」ではない「自然」の意味は、六甲山系そのもの場の確保（保護）に妥当性を与えることができる。また六甲山系を人の活動から隔離したかたちではなく、今までの六甲山系を創りあげてきた人々と同様にかかわりの場として、総体的に捉え続けることが重要である。

9-2-2. 観念的ではない自然観がもたらす「自然」への「態度」

「総体」としての環境を守ることは、その場における人々の活動の在り方、活動形態の選択も対象の範囲を広げるものである。六甲山系において、明らかになった観念的ではない自然観、つまり六甲山観は六甲山系の「身近さ」という距離間にも関係している。まず、六甲山に入り、「遠い山」が物理的に近づいてきたときに六甲山に立つ人々の表現に変化が生まれる。登六庵に来ていた、最近六甲山に引っ越してきた40代女性Yさんは、六甲山で

の生活について「森に囲まれて、暮らすんは最高や¹⁹⁶」と語る。またノルディックスティックを使用し登山をしていた C さんは「森の中歩いてたら、いろんな音がするやん。色もいっぱいやし」と話す。矢野氏も「森の整備は、やっぱり課題ですね、行政がやってくれたらいいけど、なかなかそうもいかんでしょ¹⁹⁷」と話す。六甲山系のなかに入るとそこは、「山」ではなく「森」へと変わるのである。この言葉の変化はなにを意味しているのだろうか。まず、六甲山系という「森林景観は、背景として機能することが多いため、人々に意識されにくいが全体の印象には大きく影響し、地域に生活する人々の地域への愛着や帰属意識にも結びついている¹⁹⁸」。この愛着や帰属意識から生じる六甲山への関心が、人々を「遠い山」である六甲山へ向かわせ、「楽しむ場」として物理的な距離だけではなく、より具体的・身体的に近づいてくる。これは前章で考察した、六甲山観深化プロセスに関係している。物質的景観であった背景のなかに、自らが身体的なかかわりを持つことで、「愛着のある景観」となり、その関心がさらに、「楽しむ場」である六甲山系を「意味のある自然」へと導いていく。このプロセスのなかで、「山」が「森」という表現に変化していくのである。

菅原聡は、森とは奥山をさし、生活と遠い場所であったのに対し、林は生活に近い里山を指していたと指摘する¹⁹⁹。しかし近代化による「林」の減少が、自然に対する思想的接近による羨望から人を「森」に近づけたと述べている²⁰⁰。「山」という表現に示される物質的景観が、「森」へと変化していくことは、親和的・共生的な六甲山系を精神的側面から近づいた結果と考えられる。そしてその「森」での営みが行われている「山」が「意味のある自然」へと還っていくことで具体的に六甲山系の意味づけが行われ、観念的ではない自然観の形成につながっている。聞き取り対象者から「林」という表現が一切使用されず、常に「森」と表現されていたが、その利用の際に行われる言葉の選択がどのように行われているのかは、本論文において明らかにできなかった。しかし、「山」から「森」という表現に変化する過程は、六甲山観の深化プロセスの考察から明らかになったといえる。

近代化の波におされ、里山ではなくなり禿山となった六甲山系を「山」として復活させたことが、周辺住民と六甲山系を具体的・身体的に近づけるきっかけを生んだ。それが「遠

¹⁹⁶ Y氏聞き取り：2012年11月17日

¹⁹⁷ 矢野氏聞き取り：2012年11月17日

¹⁹⁸ 下村彰男 2004「生活者にとっての森林環境」井上真ほか『人と森の環境学』平文社 p.44

¹⁹⁹ 菅原聡（共）1995『遠い森・近い林』愛智出版 p.48

²⁰⁰ 同上：1995：p.65

い山」から「近い森」への深化したのである。「山」から「森」という表現の変化は単純な言葉の変化だけではなく、自然を見る視点と六甲山での多様な実践から、その存在が深化し、日常生活で景観として捉えられた六甲山から、「楽しむ場」や「生活の場」のなかに存在する「森」というより近い存在へと変化しているといえる。

つまり、人の生活や文化、レジャーやガイドを通じた活動が、抽象的な存在であった「六甲山系」の存在価値の具体性に寄与している。世間一般に染み渡っている「自然を大切にすべきだ」という言葉で使われるような普遍的な自然とは異なった、個人のなかに「六甲山系」という具体的な「自然」が生まれる。文化的側面を伝えたり、実践することで、六甲山系の価値が引き出されるのである。

また「共生」という言葉がもつ「自然」との親和性と「共存」という言葉がもつ心理的距離感とは、「自然」を遠くに配置しているかどうかの問題ではない。物理的距離感の縮小から始まり、心理的距離の接近につながる場合も上述のようにあるが、「共存」という言葉を意識的に使い分ける周辺住民の、常に親和的ではない「自然」に対するより感覚的な態度の表れなのである。それはある意味で、絶対的な威力を持つ「自然」の経験的理解の表れともいえる。よって「共生」と「共存」のあいだの距離性は、同じ土俵で測りうるものではないのである。その場における経験や多様なかわりが具体的にもたらす「態度」としての表現手法なのである。

9-2-3. グループが残した「新しい山の遊び」の文化的役割

「自然」という定義は、これまで多様な議論を生んできた。また同時になぜ「自然を守らなければならないのか」についても、多くの議論をもたらしてきた。「自然」というものについて考え、議論することは、人間にとって重要な課題でもあった。代表的な論争としては、アメリカの自然保護運動の先駆けとなった、ギフォード・ピンショーとジョン・ミューアによる「保全」「保存」論争などが挙げられる。この論争は、アメリカ、ロサンゼルス郡の深刻な水不足の解決のために、現ヨセミテ国立公園内にあるヘッチヘッチ溪谷のダム建設計画に端を発するものである。のちに、彼らの論争は、国立公園の設定などに貢献することとなり、一般市民にも広く「自然保護」という考え方が広まっていくきっかけに

なったという²⁰¹。しかし、近年は、自然理解は文化概念を通じてしかありえないという主張も見られるようになった²⁰²。氣多は、「自然は常に社会化されている²⁰³」とする。二次的自然であれ、原生自然であれ、どのような自然も「自然科学」という学問のなかで理解されることでさえ、社会化されていることの表れだという²⁰⁴。では、自然理解を可能とする文化概念とはどのようなものなのだろうか。

笹口は文化の構成要素は、3つに大別され、知性の文化、生活の文化、感性の文化として²⁰⁵。なかでも生活の文化は、「文化のはじまり」であり、知性の文化、感性の文化はそれに並行して発展してきたと考察している²⁰⁶。六甲山へかかわるといふ生活の文化が、六甲山系を含めた「自然」への感性を向上させるきっかけとなり、問題意識や関心の拡大といふ六甲山観の形成といふ知性の深化の入り口になっていると考えられる。六甲山系での多様な営みは、「文化」の表れといえる。文化形成が、六甲山系における多様な営みの継承の手段となる。また中村良夫は「環境というものは、客観的に眺めるものではなくて、意味をつけることでうまく文化として人間界に融合していたのではない²⁰⁷」かと述べ、人と自然の関係をつなぐものとして「文化」を位置づけている。

六甲山系におけるこの文化形成の土台になっているのは、グループが持ち込んだ「新しい山の遊び」だろう。従来、人と自然の関係において、着目されてきた「お互いに影響を与えながら成り立ってきた」里山は、生物多様性保全の視点を多く含んでいた。しかし、六甲山系には、その視点だけでは育まれていなかった、より「楽しみ」を重視した「遊び」の導入によって、六甲山系の意味づけが周辺住民によって具体的に行われてきた。またそれが「誇るべき景観」としての地位を獲得する起点にもなってきた。そして、多様な「遊び」や「仕事」、「住む」ことを通じて、次世代にさまざまな手段で継承される素地を築いてきたのである。この「文化形成」が、多角的に行われることによって、六甲山系は周辺住民のアイデンティティとなってきたのである。以上から、六甲山系は周辺住民にとって、観念的ではなく、具体的・身体的かかわりをもって理解され、意味づけされてきた自然的

²⁰¹ 岡島成行 1990 『アメリカの自然保護運動』 岩波書店 p.92-95

²⁰² 吉田雅章 2000 「環境問題と文化」、長崎大学文化環境研究会（編）2000 『環境と文化〈文化環境の諸相〉』 九州大学出版会 p.38

²⁰³ 氣多：2012：p.105

²⁰⁴ 氣多：2012：p.99

²⁰⁵ 笹口：1997：p.27

²⁰⁶ 同上：p.28

²⁰⁷ 中村：2005：p.48

環境であるといえる。六甲山系もまた、人間の活動や経験の意味づけによって社会的に理解されてきたものなのである。神戸市民と六甲山系とのあいだに構築される関係性が、さまざまな形（植林や間伐といった具体的な山の手入れだけでなく、観光やハイキングなど気軽に楽しめる関わり方など）で実現されることに六甲山系独自の価値がある。都市におけるさまざまな営み、とくに「遊び」の要素から、関係性を分析したことで、観念的とされてきた都市における自然観を、具体的に捉えることができた。

9-3. 本研究の可能性と限界

かつて、里山は、奥山と里のあいだにある、自然と人界のバッファゾーンとしての機能をはたしていたという。そのような区域が存在しない六甲山系の地形から六甲山系はやはり自然的環境との関係において特異性が認められる。バッファゾーンの比較的少ない場所において人と自然の関係を支えうるものは、営みの多様性を支え、文化形成を担う場所性にある。時代の変遷のなかで禿山になり、外国人の参入によって新たな価値を与えられ、治山の重要性と文化的発展の土台となり、企業や行政の開発とともに、多様な営みを継承し続けることによって育まれた、六甲山系と神戸市民の在り方なのである。それを六甲山系の事例で明らかにすることができた。しかし、神戸市は150万以上の人口を抱える大都市であり、万人が本論で述べてきたようなかかわりと持っているとは言い難いことは事実である。また六甲山系が静的な物資哲的景観の域を出ない人も存在するだろう。しかし、聞き取り調査のなかで明らかになった、かかわりを持っていくなかでそれぞれの六甲山観が六甲山系という場所において形成されてきたということは、個々人の詳細に迫れば、ここで明らかになった以外にもさまざまな六甲山観の存在の可能性を示唆するものである。また少なからず、本論でとりあげられてきたような人々の存在が明らかになったことで、六甲山系の歴史性が継続してきたことを示す証にもなっている。同時に、今後、六甲山系の歴史が、創造され継承されていくための一端を担うと考えられる。歴史認識の重要性を物語ると同時にその意味づけが不変・普遍的なものではなく、かかわりのなかで行われていくということに人と自然がかかわる意味があると考えられる。

本事例が示唆するものとして、「公園緑地保全」や「愛着のある景観形成」がどのような過程において意味づけされていくのかという点が挙げられるだろう。またその過程によって形成される文化的側面の重要性も明らかにできた。しかし、それらが近年、議論が盛ん

になっている「里山論」において、「里山」の定義拡張に貢献しうるものであると考えるが、
そこまで議論を展開することができなかつたため、別の機会に譲りたい。

10. 参考文献

- 石城謙吉 1994 『緑はよみがえるー都市林創造の試みー』 講談社
- 石川幹子 2001 『都市と緑地』 岩波書店
- 井上有一 2001 『ディープ・エコロジーー生き方から考える環境の思想ー』 昭和堂
- 井上有一・今村光章（編）『環境教育学 社会的公正と存在の豊かさを求めて』 法律文化社
- 岩村高治・横張真 2001 「神戸市における地域住民による公園管理の実態とその展望」
『ランドスケープ研究』64（5）p.671-674
- 上田和弘ほか（編） 2005 『都市のアメニティとエコロジー』 岩波書店
- エドワード・レルフ 『場所の現象学ー没場所性を超えてー』 1999 筑摩書房
- 岡島成行 1990 『アメリカの環境保護運動』 岩波書店
- 嘉田由紀子ほか（編） 2000 『共感する環境学』 ミルネヴァ書房
- 加藤尚武 2006 『新・環境倫理学のすすめ』 丸善株式会社
- 神生秋夫 （不明） 「神戸市有料道路物語」『神戸の歴史』3号 神戸市史学会
- 川島竹宜ほか 1954 『入会権の解体』 岩波書店
- 氣多雅子 2012 「自然災害と自然の社会化」『宗教研究』86巻（2）p.85-106
- 北村昌美 1995 『森林と日本人ー森の心に迫るー』 小学館
- 鬼頭秀一 1996 『自然保護を問い直す』 筑摩書房
- 鬼頭秀一（編） 1999 『環境の豊かさを求めて 理念と運動』 昭和堂
- 鬼頭秀一/福永真弓（編） 2009 『環境倫理学』 東京大学出版会
- 熊谷洋一、下村彰男ほか 1995 「マルチオピニオンリーダー 本多静六 日比谷公園
の設計から風景の解放へ」『ランドスケープ研究』58(4) p.349-350
- 神戸市 1941 『神戸区有財産沿革史』 不明
- 神戸市 2003 『六甲山の100年 そしてこれからの100年』
- 神戸市 2009 『守りたい 神戸の生き物百選』 神戸市
- 神戸市 2010 『神戸市における生物多様性の現状と課題について（修正版）』
- 神戸市経済部山地課 1939 『治水の根本策を神戸市背山に就て』（議事録）
- 神戸市建設局公園砂防部 『神戸森の学校パンフレット』
- 神戸市建設局公園砂防部森林整備事務所 2005 『六甲山地・再度山の森林のむかしと

- いま 再度山永久植生保存地調査解説』
- 神戸市土木局緑地部計画課自然環境係 1988 『神戸市の森林利用管理』
- 神戸市土木局公園緑地部 1996 『神戸市森林整備計画 概要版』
- 神戸市 2007 「神戸市民1万人アンケート」 神戸市市民参画推進部広報課
- 神戸新聞社 1995 『「阪神大震災」』全記録 神戸総合出版センター
- 笹口健 1997 『文化とはなにか 知性の文化の発見』 近代文芸社
- 下村彰男 2004 「生活者にとっての森林環境」 井上真ほか 『人と森の環境学』 平文社
- 週刊ダイヤモンド社特別取材班 2001 『神戸・都市経営の崩壊—いつまで山を削り海を埋め立て続けるのか』 ダイヤモンド社
- 三分一純ほか 2007 「オープンガーデン実施者の開放性に関する意識構造の検討」『ランドスケープ研究』70(5) p.391-396
- 洲脇一郎 不明 「六甲山の入会林野の解体」『歴史と神戸』14号 神戸市史学会
- 竹中靖一 1933 『経済史的に見た六甲』 明文堂
- 玉起彰三 1997 『六甲山博物誌』 のじぎく文庫
- 只木良也 1988 『森と人間の文化史』 NHK出版
- 鳥越皓之 1997 『環境社会学の理論と実践』 有斐閣
- 中村良夫ほか 1994 『景観づくりを考える』 枝報堂出版
- 中村良夫 2005 『環境と空間文化—建築・都市デザインのモチベーション—』 学芸出版社
- 林まゆみ 1996 「阪神大震災後のまちづくり運動と住民の意識にみられるランドスケープの位置づけ」『ランドスケープ研究』60(1) p.61-64
- 平田富士男 2004 『都市緑地の創造』 朝倉書店
- 兵庫県立人と自然の博物館 『都市山六甲山の植生管理マニュアル』
- 藤居良夫 2005 「地方都市における街区公園に対する住民意識の分析」『ランドスケープ研究』68(5) p.833-836
- 古澤達也 1999 「大都市圏計画と大規模公園緑地」『ランドスケープ研究』62(4) p.304-307
- 本多静六 1939 「治水の根本策と神戸市背山に就て」 神戸市経済部山地課
- 本多静六 2006 『本多静六自伝体験記八十五年』 実業之日本社

- 丸山徳次（編） 2004 『応用倫理学講義2』 丸善株式会社
- 丸山康司 1997 「自然保護」再考 - 青森県脇野沢村における「北限のサルと「山猿」
- 『環境社会学研究』 (3) p.149-164
- 丸山康司 2004 『サルと人の環境問題－ニホンザルをめぐる自然保護と獣害のはざま
から－』 昭和堂
- 水野祥太郎 不明 『神戸背山』 不明
- 宮崎雅雄ほか 2004 「多摩丘陵におけるフットパス計画による里山景観保全への取り
組み」『ランドスケープ研究』 68 (2) p.126-129
- 森岡正博 2008 「人間・自然－自然を守ることとはなにか」 鬼頭秀一/福永真弓（編）
『環境倫理学』 東京大学出版会
- 山本吉之助 『神戸の歴史4号 明治以後の六甲の変遷』
- 横張真（編） 2012 『郊外の緑地環境学』 朝倉書房
- 安田章人 2008 「持続可能性を問う」 鬼頭秀一./福永真弓（編） 『環境倫理学』
第8章 東京大学出版会 p.130-145
- 吉田雅章 2000 「環境問題と文化」、長崎大学文化環境研究会（編）2000 『環境
と文化〈文化環境の諸相〉』 九州大学出版会

ウェブサイト

「神戸市」ウェブサイト

<http://www.city.kobe.lg.jp/life/access/harbor/rekishi.html> (2010.07.11 ; 2013.01.10)

<http://www.city.kobe.lg.jp/information/public/online/rokkosanpo/about/c05/img/photo01.gif> (2012.12.28-2013.01.26)

「神戸旧居留地」ウェブサイト

http://www.kobe-kyoryuchi.com/kobe_kyoryuchi/miserarete/index_rekishi.html
(2010.09.09 ; 2012.12.30)

都市公園法ウェブサイト

<http://law.e-gov.go.jp/htmlldata/S31/S31HO079.html> (2012.10.05 ; 2013.01.27)

「ブナを植える会」ウェブサイト

<http://www.bunawouerukai.jp/index.html> (2010.05.11-2013.01.13)

「図録 世界の貿易港ランキング」ウェブサイト

<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/6680.html> (2010.10.20)

「国土交通省近畿地方整備局六甲砂防事務所」ウェブサイト

<http://www.rokko.kkr.mlit.go.jp/business/GB/greenbelt-bus.php> (2010.10.28)

聞き取り調査

神戸市環境局環境創造部環境評価共生推進室 西谷寛氏 (2010年04月22日、2010年06月15日)

神戸市建設局公園砂防部森林整備事務所 高畑正 (2010年10月06日)

登山者A氏、B氏、C氏、D氏、O氏、K氏 (2012年10月25日)

登山者T氏、N氏 (2012年10月30日)

登六庵店主 矢野氏 (2012年9月25日、2012年10月31日、2012年11月17日、2012年11月23日)

兵庫県自然保護センター M氏 (2012年10月25日、2012年11月11日)

ホールアース自然学校 大武圭介氏 (2012年10月25日)

六甲山専門研究員 高橋敬三氏 (2010年06月18日、2010年10月6日、2010年11月13日)

NPO法人エコレンジャー元会長 朝戸吉照氏 (2012年10月23日、2014年1月2日)

謝辞

本論文をまとめるにあたり、本当に多くの方々にお力添えをいただきました。

指導教官である鬼頭先生が、厳しくも丁寧にご指導して下さったおかげで、ここまでくることができました。たくさんのご心配とご迷惑をおかけしてしまいましたが、もう一度戻りたいと思える場所を残してくださり、また迎え入れてくれたことを心から感謝しております。

また副指導教官である清水先生にも、多くのアドバイスをいただきました。鬼頭先生とはまた異なった視点でのコメントは、新しい発見につながるものも多く、深い学びにつながっていきました。鬼頭研究室の皆様にも、ご心配とご迷惑をおかけしながら、多くのアドバイスをいただきました。皆様の研究に対する姿勢は、尊敬すべきものでありました。また復学の際にも温かく迎えてくださり、鬼頭研に所属できたことを心から嬉しく思っています。

ここに至るまで、紆余曲折してきましたが、鬼頭先生をはじめ本当に多くの方々にごここまで導いていただきました。また聞き取り をさせていただいたすべての皆様に深くお礼を申し上げます。私の知らない六甲山と神戸の魅力と、「自然」に対する考え方をたくさん教えていただきました。とくに 2009 年からお世話になっている朝戸さんにはたいへんお世話になり、感謝しています。

学部時代に「考えることの楽しさ」を教えてくださいました井上有一先生、また当時から共に歩んできた藤田景子さん、東京学芸大学の原子栄一郎先生とそのゼミ生たち、研究の苦しさを支えてくれた神戸からの友人たちにも心から感謝しています。みなさんがいなければ、研究の楽しさを実感できた今の私はいなかったと思います。

私のすべてを理解し、自由に生きる身勝手さを許してくれた太陽のようなパートナーとこれまで支え続けてくれた両親、姉妹に最大限の愛情と感謝を示したいと思います。

皆々様のおかげで私の人生は彩豊かなものになっています。鬼頭研の学生として、今日まで過ごせたことは、私の誇りです。本当に、ありがとうございました。